

389
389
29



始



東京新聞社

修養叢書第三篇

努力成功の實例

389-29

陸軍大臣 陸軍中將 田中義一閣下推奨
文學 士若月 保治著

模範青年 努力成功の實例

修養叢書 第三篇

新月社發行

大正 9. 8. 3 内交

推獎の辭

世界大戰の影響を受けて、時勢は今驚くべき勢を以て變化しつつある。
此時に方りて、日本が要求する新青年は、いよく我國民精神を發揮して
ますく我國力を豊富にし、國威を伸張せしむることに向つて努力するも
のである。換言すれば、新時代に於ける新青年は、専ら剛健勇武にして奉
公犠牲の念に富み、質實順朴にして勤儉力行の徳をそなへ、自ら治むる
力あるものでなければならぬ。斯の如くしてよく、軍に在りては良兵とな
り、郷にありては良民となり、來るべき日本を眞に双肩に擔ふことが出來

るのである。しかも往々にして修養足らず、徒らに驕奢の風に染み情弱に流れ、自ら新時代の青年たることを忘れ、其責任の如何なるかを顧みざるが如きものあるは、歎ずるに餘りあることである。

今青年修養の参考として公にせられたる此書を見るに、一般青年の氣風を剛健ならしめ、軍人の士氣を鼓舞するに甚だ適當にして、講話訓育の資料としても、また頗る有益であると思ふ。即ち敢て之を推奨する次第である。

大正九年五月

陸軍中將 田中義一

はしがき

一、此書は一般青年及び軍人の修養上の讀物たると同時に、軍隊教育者その他一般教育者の、講話訓育の助爲さんことを目的として、著はしたものであります。

二、著者は此目的を達せんが爲に、全國の軍人分會、青年團等種々の機關に向つて其材料を求め、出来るだけその粹をぬくと同時に、帝國在郷軍人會本部の許諾を経て「戦友」上から、其素材を仰いだことも少くありません。茲に謹んで各方面に對して厚く御禮を申上げる次第で御座います。

目 次

一	所謂ゑらい人とは何か……………	一
二	人間一生の本當の目標……………	四
三	如何にしてゑらくなるか……………	六
四	成功は努力の副産物……………	九
五	努力するものにば口實はない……………	一二
六	「己れだつて人間だ」の一語……………	一六
七	自分の頬を打つて語學を勉強す……………	一九
八	大馬鹿が遂に大石を移す……………	二二
九	己にも男の意地がある……………	二六
一〇	まあ見て居ろ……………	二八
一一	今にわかる、今にわかる……………	三三

三、此書に掲載した材料は、勿論集め得たものゝ一部分にしか過ぎませんが、今後各方面から、盛に模範軍人や、模範青年の經歷を詳細に推奨せらるゝことを得ますと同時に、此書の歓迎が、更に相ついで續刊を促すこととなりませれば、それは著者ばかりの幸ではなく、やがてそれが惹いて、國民精神の鍛練上に自ら裨益するところ少くないだらうと信じます。

四、此書の中に現はれる軍人や青年諸君の身上に、其後異動や變化の起つてゐることも少くないだらうと思ひますが、それについては可成りに大きい眼で見て頂きたいのであります。

五、模範軍人の實例と努力成功の實例即ち模範青年の實例とは、申すまでもなく、一個の姉妹篇をなすのであります。

二五	農事に熱心な良青年	一〇二
三四	百五十人中唯一の努力家	九五
三三	十三歳の快少年南洋に雄飛	八八
三二	夢中で郵便局に駆けつく	八四
三一	軍隊教育の花	八二
三〇	誠心玉の如き二青年	七七
二九	輕蔑されて奮勵す	七四
二八	努力は人を輝かす	七二
二七	死んでも勝つて見せる	六九
二六	隠れたる天才音楽家	六七
二五	至誠遂に祖父を改心さす	六四
二四	至孝至誠の頌徳碑	六二

二三	苦學の汁粉屋と牛乳配達	六〇
二二	一圓の金を千倍にした今二宮	五六
二一	體さへ運べば幸運は来る	五五
二〇	夜も四時間以上は寝ぬ	五二
一九	人の悪口が原動力	五〇
一八	五十四歳で醫者になる	四八
一七	「言海」を書き寫して暗誦す	四六
一六	本を引裂きながら勉強す	四五
一五	苦しければいよく努力	四三
一四	短い一生に永い仕事	四一
一三	不斷の努力不屈の精神	三九
一二	他人は遂にたよるに足らぬ	三六

三六	血書で徴兵合格を願ふ……………	一〇三
三七	夢の中にも懸命に稽古す……………	一〇六
三八	カーネギーは何故にゑらいか……………	一〇八
三九	よく金を用ふることを知る……………	一一七
四〇	現代の大發明家エヂソン……………	一二二
四一	永久に忘れられぬ大發明家……………	一二六
四二	大發明家の努力と性格……………	一三一
四三	成功と失敗の原因……………	一三七
四四	成功を求むるに誤解してはならぬ……………	一四二
四五	成功の意義と之を得べき要素……………	一四七

目次(終)

修養叢書 第三篇 努力成功の實例

一 所謂ゑらい人とは何か

子供が生れて、どうかかうか口がきけるやうになるに、殊にそれが男の子であれば、親は必ずそれに向つて、ゑらいものになるやうに祈り、ゑらいものになることを子供にも奨励し、要求する。従つて子供の方でも、所謂ゑらいものになることを以て、人間最大の目的であると心得、次第に自らもそれを確信し、人に向つても、ゑらいものになるんだと云ひ、またさうなうとして努力する。これが普通一般の有様である。

けれども親の方では、果して如何な人が眞にゑらい人であるかについては、明かに之を子供に明言し又は明言し得るものは甚だ少ない。だから子供の方でも、みんなのが本當にゑらい人であるか、みんなになつたら、ゑらいのであるか、それが充分に分らない。

普通の子供はまだ只外見丈しか見る力がない。だから一般の子供にとつては、例へば軍人だとか、官位の高い人だとか、服装が立派であるとか、威勢がいゝといふやうなことが、兎角ゑらいと見えがちである。いやこれは子供ばかりではなく、低い頭脳よりもつて居ない一般の人にも通有なことで、此點からいふと、寧ろ一般の大人の方が子供よりは可哀想なものである。子供にとつては單に威勢がいゝとか服装が立派なといふやうな、つまらない小さいことが頭に深く染み込むだけであるが、頭のない一般の人になるに、社會上の地位が高いとか、金があるとか、幅がきくといふやうな、下らぬことのみがゑらく見えが

ちである。人間の眞の生活といふことからは、殆んど何の價値もないことが、最もゑらく見えるのである。さうしてかう思ひ込んだ人々は、もう救ふことが出来ぬまでに、頭が墮落し切つてゐるのである。單に外形の美しさに迷はされた子供の頭は、だんぐりに進むに従つてまだ進歩してゆくが、物質的虚榮にのみ迷はされてしまつた大人の頭は、最早かたまり切つて始末におへぬのである。それでは一體どういふ人が人間として一番ゑらいのであるか、本當にゑらい人といふのはみんな人をいふのであるか。

これは一寸考へるに、實に下らぬことのやうに思はれるかも知らぬが、その實人が一生を生きてゆく上に於て、最も大切なことでなければならぬ。何の爲に生れたのか、何の爲に生きて居るのか、生きて居るからにはどうしなければならぬかといふことを考へると、只食つて飲んで死ぬといふだけでは、どうしても本當に生きて居る甲斐がない氣がするといふことは、誰にでも直ぐと分る

こゝである。さうかして本當にゑらくならねばならぬ、かういふ進歩向上の精神は、有ゆる人間に皆先天的にそなはつて居るのである。だから此點は充分に子供の時から考へて置かねばならぬことなのである、知つて置かねばならぬことである。考へもせず知りもせず、只わけもなく食つて居る丈で、又食はうとしてゐる丈で、コツ／＼とやつて居ると、一生はいつの間にか犬猫と同様に終つてしまふからである。

二 人間一生の本當の目標

一體ゑらいさかゑらくないさかいふことは、多少は程度の問題である事は勿論だが、先づ眞にゑらいさかいふことはどんなことであるかを知る爲には、人の一生の本當の目的がどこにあるのか、どこに向つて人間は目標を置いてかゝるべきか、さかいふところから説くべきだらうと思ふ。

忘れてはいけない、人がたとへば山に澤山の富を積まうと、どんな高位高官に上らうと、亦大臣や大將にならうと、只それ丈けが少しもゑらいのではないことを。人の人としての本當の目的は、そんな小さな下らぬことではない。そんなことは、まだ人間の進むべき目的地の、路ばたにある風景のやうなものである。人間の本當の到着しなければならぬ目的地は、人がもつて生れた色々の力を出来る限り仕上げて、それによりて、自分さかいふものを最上の立派なものとし、出来る丈けの力を出して、それで國家や社會を自然に進歩させ、やがては人類一般の自由幸福を進めてゆくといふことである。それが吾々の進まなければならぬ最後の目的地である、最も美しい第一の目的地である。

かういふ風に目的地が分る、人が向つて進むべき目標が分つたとすると、吾々が如何にすれば本當にゑらくなれるのか、どんな人が、どんな行をするのが、さかいとかいふことは、自然に分つて来る筈である。此目的地に向つて進まうと

努力すること、それが吾々の務であつて、その爲に大きな努力をすればする丈
け、人はゑらくなるのである。又その努力の大きな人だけがよけいにゑらい人
なのである。

それでは吾々はさういふ風にすれば、その目的を果す爲の努力をすることに
なるか、そんなことは誰にでも出来るのであるか、普通の人にでもそれは出来
るのであるか、最初からゑらい人でなければ、そんなことは出来ぬのではない
かといふことになる。

三 如何にしてえらくなるか

私は即ち人がゑらくなる方法について述べなければならぬ。

私は断言する、人は誰でもゑらくならうとして努めさへすれば、ゑらくなれ
るのである。さうして自分の出来る丈けを盡せば、それでも立派にゑらい人

なのである。例へば青年が仕事をするにも、軍人が軍務を盡すにも、または學
生が勉強をするに方つても、強ひられて、いや／＼でやるのでなくて、自分の
心からやらうと決心して、有る限りの力を盡し、出来る限りの時間をそれにさ
いたさする、その青年も軍人も學生も、最早それで立派にゑらい人なのである。
學生が只試験を受ける爲に勉強をするのでなく、青年が人からほめられる爲に
働くのでなく、軍人が叱られたくないが爲に、上べばかりの熱心をよさうので
なく、たれもかれも皆自分を立派にする爲に努力し勉強する、そしてそれに全
力全時間全精神を打込む、それで其人は立派にゑらい人である。彼はかう
して自分を仕上げ、自分を完成してゆくことが出来るからである。
自分を完成するとは何であるか。人は誰でも何かにゑらい所をもつて生れて
ゐるものである。そのゑらい所を全力をそゝいで、伸びられる丈け伸ばし、立
派に仕上げをするをいふのである。考へる力に秀でたものは、考へるといふ

不登社の多し

ことによりて深い眞理を發見する。發明力に優れたものは、何かの發明をして新しい文明をつくり出す。工夫力に優れたものは、何かを工夫して新しく何かをつくり出す。優れた詩才をもつたものは、立派な詩をつくり上げる。繪の才能や音樂の才能をもつたものは、それに至精神を傾けて伸びる丈けのばす。かうして新しいものを創り上げて、人としての自分を、一種の力をもつた強い大きなものと仕立て上げる。人物としても他人が尊敬しなければならぬやうな、美しい點を、多く深く高く大きくする。それが皆自分を完全にすることである、完成するこいふこみである。

人が皆自分自身に、出来る丈けの範圍で全力を盡して、自分の利益といふやうな狭い考へからはなれて、自分よりもつと大きなもの、即ち國家社會人類といふことを頭の中に絶えずもつて、自分の力を懸命に伸ばしてゆく。かういふ事は最初からゑらい人でなければ、決して出来ぬこみではないのである。

る。たれにでもその人想應に出来るこみである。それをやらうとする事、それをやる事即ちその努力が人にしてゑらいのである。何故であるかこいふこみ、それが國家社會人類の爲に直接間接に役に立つからである。國家社會人類は皆その人々の影響を受けて、だんくんに進歩し發展し、強くなり盛んになり、次第に善くなり美しくなつて、お互がいよく自由に幸福になつてゆけるからである。くれぐれもゑらい人といふこみと、吾々人生の目的がどこにあるかこいふことを考へちがへをしてはならぬと思ふ。

四 成功は努力の副産物

かういふ風に考へて來ると、ゑらい人になるこいふことは、只努力するといふこみであり、努力するといふこみが即ちゑらい人になるといふことである。努力の度合が大きければ大きいほど、其人は餘計にゑらいといふことである。

人のゑらい、ゑらくないといふことは、要するに努力の度が大きいか小さいかといふことである。

幾ら天才であつても、その人がもつて生れた天才を、努力によりて磨かなければ、天才も本當の光を輝かすことは出来ない。どんな學者も勉強せずに、努力せずして、深い學理が分るものではない。どんな發明家でも、いろいろな發明をするには、さまざまの努力をつまなければならぬ。電燈や電話や蓄音機など、限りもない澤山の發明をして、人類の文明の上に驚くべき大影響を及ぼしたエヂソンも、此等の發明を仕上げるまでには、どれ丈の努力をつとけ來つたか知れないのである。エヂソンは實に今でも毎日四時間より多くを寝たことのない人である。彼の全身は只努力の塊である。否、エヂソンの一生は努力其物である。努力の歴史はエヂソンだといつてもさしつかへはないのである。努力は實に人間が此世に生きてゆく上に於て、最も尊いものである。これを

措いては人生には活動がなくなり、進歩の展がなくなり、いな人生そのものがなくなるのである。努力は實に人生の光であり、成功の基である。

けれども人の成功は、努力ばかりでは得られるものではない。熱心だの、才智だの、注意だの、學問だの、忍耐だの、いろいろなものが之に伴はなければならぬ、といふのがあらう。それは勿論のことである、分り切つたことである。けれども熱心や注意や才智や學問が、人を成功に導びくよりも、最も多くの人を眞の成功に導びくものは努力である。いなこれ等の凡てがあつても、只一つの努力がなくては、成功が得られない場合が甚だ多いのである。此意味からいふと、普通一般の人々にとつては、成功の秘訣は努力が大部分であるとい

はなければならぬ。

滿身の努力、熱心な努力、用意周到な努力、智慧をしほり汗をしほつての努力、根かぎり力かぎりの努力、此等を盡して、其各々得意とする所に向はゞ、人

生決して不成功といふことはないのである。

努力は要するに成功の母であり、努力あつて始めて人生がある。努力ありて始めて人はゑらくなるのである。いな人は即ち努力するといふことがゑらいのである。成功は之に伴ふ副産物である。努力せよ！ 勇敢に努力せよ、成功は其結果として自然に現はれて来るのである。

五 努力するものには口實はない

近頃一外國雑誌を見るに、こんなことが書いてある。歐洲の大戦争最中、獨逸のツエツペリン飛行船は、非常な冒険をやつては、折々倫敦の空へ飛んで、上から市街をめぐらして、ぎんぐミ爆弾を投下した。市民の驚きと怖れといったら一通りではなく、夜になると、市民は必ず燈火を消し、いざいふ報知があると同時に、皆穴倉へかけこむ用意をして居る一方に、色々危険を免れる工

夫が積まれたが、その爆弾が及ぼす惨害はなかく十分免れることが出来な
い。そこで或空想的發明家は、月が照つて居てはとても駄目だ、いくら市街に
光をつけないにしても、天から月の光が輝いて居つては、到底飛行船に對して
的を與へぬといふ譯にはゆかぬ。どうかして月の面に黒い布でもかぶせる方法
はないであらうか、月の光が倫敦市街を照らさぬやうにする法はないであらう
かと工夫を凝した。かういふ話が雑誌に出てゐるといつて、一人が話をする
と、側に居た私は直ぐに冗談半分に、それよりも大きな大きな鳥賊でも取つて
来て、月の面に向つて黒みを吐かせる様にしたらよからうといつて笑つた。

誰が考へて見ても、月の面に黒い布をかぶせるといふやうなことは、人間の
力では到底出来ぬことである。少くも今日の文明の力では出来ぬことである。
けれども更に考へて見ると、世間には斯ういふやうな、本當に出来ないことで
なくて、實際やつて見れば何でもなく出来ることを、本當に出来ぬことである

が如く考へたり、又は頭から出来ぬことだと信じ切つたり、諦めたりしてしまつて、やつて見ようともせぬ人が澤山に在る。ところが普通に世の中で、やれないこと、出来ないこと、信じられ云はれて居ることであつて、努力の仕方によつては、容易に出来る事が限りもなくあるのである。

ナポレオンは伊太利へ援兵を送らうとして、大砲を牽いて、アルプス山中のサン・ベルナルの嶮を越えろと、部下の將軍に命じたところが、その將軍は直ちに『そんなことは出来ませぬ』と答へた。けれどもナポレオンは、其時更に嚴命を下して、『出来ぬといふことがあるか、やつて出来ぬといふことは世の中には一つもない筈だ、出来ぬのは心からやらぬからだ、全くと全力をこめてやつて出来ぬといふ理屈はない、世の中には「出来ぬ」といふ字は不必要だ、そんな字は字引の中から除去つてしまへ』といつた。そしていよく大砲を牽いて、サン・ベルナルの嶮を越えさせて見るに、それが見事に成功したといふ

話である。いやこれは話ではなくて實際である。

本當に世の中には、出来ぬと思はれたことで、努力と根氣と勇氣と熱心と勤勉と奮闘と忍耐と注意と智識とで、容易に出来上つたことは澤山ある。諸君の多くが仕事が出来ぬといふのは、大抵は努力と勤勉と熱心とが足らぬからである。英語や算術が六ヶ敷いといふのは勉強が足らぬからである。或一人がやつて出来るもので、他の人がやつて出来ぬ筈はないのである。出来るに早い遅い巧い拙いがある丈けである。出来るまで懸命にやれば、必ず立派に出来るのである。それを六ヶ敷いからやれぬか、やつても出来ぬなぞといふのは、怠惰者の辯解である、口實である。眞に勉強し努力し、熱心に忍耐するものには口實も何も無い筈である。本當の意味の成功といふことは、かういふ人の友人であり、かういふ人への褒美である。私は思ふ、辯解する人に限つて、六な人はない。何も辯解もいらねば口實もいらぬ。吾々は只信する所を直ちに行へ

ばいよ、善いと考へた所をとこまでもやればいよ。それより外に吾々が立派に行ひ、見事に成功し、立派に生きる方法はないのである。

私はこれから、いろいろな努力の實例をあけて、所謂成功した人や、立派な行をした人々のやり方を傳へて、修養の路に分け入り、成功の山を上らうとする青年諸君の参考にしたいと思ふ。

六 「已れだつて人間だ」の一語

嘗て信州の或土地で、小學校と中學校との、聯合マラソン競走があるといふ年の春のことであつた。或る高等小學校に居つた宮下といふ二年生は、元來が體は弱い方で、身體検査になると、いつでも「弱」いふ記しがつくにきまつて居た。けれども彼は非常な元氣な少年であつた爲に、さうかして自分も此競走に加はつて見たいといふ希望をもつて居た。

「何、已だつて人間だ、熱心に練習をつんで、身體を丈夫にしたならば、何で選手になれぬこゝがあるものか」

彼は或日のこと奮然としてかう叫んで、其晩から直ちに練習を始めた。

そして最初の晩は、二十町許りを隔てた、千曲川の堤まで、往復の駈足を試みた。さて始めて見ると、苦しいの苦しくないのつて、断然決心して始めたといふものゝ、途中で止めてしまはうかと思つたことが幾度であつたか知れぬ。いや止めやうとするではない、動悸が烈しく打つ、身體が疲勞する、足はよろしくになつて、満足に歩けさへしなかつた。けれども彼は

「そんなことでどうなるか、已だつて人間だ、此處だ、此處を我慢するのだ」
と叫んで翌晩も同じことをやつた。ところが第二夜には、最初の晩より餘程樂であつた。彼は愈元氣を出して、其翌晩も、其翌々晩も、懸命で同じこゝを繰返した。

かうして半月ほぎ経つゝ、疲勞はだんくへとつて来て、遂にはもう此道程ではなんともなくなつて来た。少年は更に其處から十町を去る八幡宮まで距離を延ばした。そして最初誓つた如くに、ぎんなに雨が降る晩でも暗い晩でも、一日としてそれを缺かすことはなかつた。やがてさうするところが次第に面白くなつた。少年は即ち、半月たつこは、更に其練習の距離を延ばすことにした。かうして延ばす中に練習する中に、少年の走る距離は、秋の初め頃には、二里餘りある犀川の畔まで延びてゐた。そして其頃には、少年の體量はもう一貫目餘りを増してゐた。

遂に競走の日が来た。少年は意氣揚々として之に加はつた。競走里程の四里は、彼にとつては何でもなかつた。少しも疲勞を感じなかつたのみか、殆んど汗もろくく出さずに、平氣で走ることが出来た。そして第一着の月桂冠は、當然彼の得る所となつたのである。

これは考へて見ると何でもない平凡なこゝである。けれども「おれだつて人間だ」此決心を仕事や學問の上に用ひて、一心に骨折つて、側眼もふらずに熱心に努力して見るがいゝ。諸君の進む學問や仕事の道に何の困難があらう、何の出来ぬことがあらう。まして試験の時や檢閲の際に困るやうなこゝがござうしてあり得るこゝであらう。

七 自分の頬を打つて語學を勉強す

語學の勉強に努めて成功した人の一例がある。それは今日朝鮮の或役所に勤めて居る一判任官氏のことである。

元來朝鮮の文官になるには、試験の時に朝鮮語が出来るか否かを試めされることになつて居る。判任官氏は、朝鮮に渡るなり、二ヶ月後に行はれる其試験にかゝつて見ようと決心したのである。試験を受けると決心したからには、勿

論朝鮮語を勉強しなければならぬ。それをやらないで試験を受けたところで目的が達せられぬのは始めから分り切つてゐる。眞に試験を受けようと決心したからには、そんなことがあつても通過して見せるといふ覺悟が入り用である。けれども彼は二ヶ月の間を、自分の家ばかりかどんで勉強することは出来ぬ。雇員として、毎日お役所に勤めて、それで飯を食つてゆかなければならぬ。それにまた、人について習ふとか、學校に入るといふことも出来ない彼は、どこまでも夜の時間を獨學で勉強しやうとした。そして必ず試験に合格する、合格しなければ決してやめない、いや、合格するまでは何度でもやるといふ覺悟をしたのである。

彼は直ちに日鮮會話といふ赤い表紙の小さい本を買つて、頭から残らず暗記することにした。そしてさうしても覺え難い字は、カードの表に記し、其裏には日本語を書いた。唯それ丈けなら何でもないやり方である、普通一通の方法

である。けれども彼は表を見て日本語の意味を考へ出して、萬一それを誤つて居ると、いつも直ちに力をこめて、掌でウンミいふ程自分の頬を打つた。そして自分の力を頭の中に集めるやうに工夫した。かうして、日によるミ、自分の頬は甚しく腫れ上がることがあつた。さういふ時には、彼は鏡に向つてニヤリ／＼と笑つた。その有様をみると、友人達は皆「彼奴は氣が狂つたのだ」と、密かに云ひ合つた。けれども彼は一心不亂であつた。人が笑はうが罵しらうがそんなことは彼には何でもなかつた。堅い決心と、決心を成し遂げる覺悟と、それが唯彼の努めであつた。二ヶ月の後に試験を受けた時には、朝鮮語の問題は、彼には何の苦もないものであつた。彼が見事に合格したといふことは云ふまでもなからう。

昔の人には、眠くなるミ、額の眞中に鑛を立て、勉強したものがあるといふ例にまねて、私もまたさういふ時には、ナイフの先を額に差込んで本を讀み、

今でも毎日それを實行してゐるが、今述べた判任官氏のやり方は、かういふ努力の方法と聊か似たものである。學校へ下調べをして行かないとか、ろくく復習しないとかいふやうな人が、語學の力の進まないのは當然であるといふよりも、判任官氏の努力の仕方なさに比べると、寧ろ可笑しい位であると思ふ。

八 大馬鹿が遂に大石を移す

「徒然草」といふ本には、愚公といふ男が、山を移さうとしたといふ馬鹿々々しさが笑つてあつたと思ふ。成程山を移すといふやうなことは、一寸考へるに人間の力では出来さうにないことである。けれども今日では色々の器械の力をかると、それも強がら出来ぬことはない時代となつて來た。唯それに入るのは、忍耐力と熱心と根氣である。

私は嘗て東京の寄席で、猫八といふ男の色々な鳴聲の眞似を聞いたことがあ

る。彼は猿や象の聲をまねるこごがうまいばかりでなく、鳴聲や音なら何でも眞似をする。鶯の谷わたりだとか、蛙やカナリヤの雄雌の鳴き分けなどは、最も得意なものである。殆んど本物よりもうまい位である。いや本物でも上手な奴でないと、猫八ほどの聲は出せないこと請合である。一たび猫八をきいたもので驚かぬものはないのである。けれども吾々は只猫八をきいて感心しただけではいけぬ、驚いただけではいけぬ。雌の蛙、雄の蛙、子蛙、老蛙と、色々の蛙の鳴聲を鳴き分ける爲に、練習し研究すること七年もかゝつたいふ、彼の熱心と努力と根氣とに驚歎して、大に奮勵させられる所がなければならぬ。源水の「獨樂廻し」を見てもさうである。「甘いものだ！」唯それだけではいけぬ。感心すると同時に、自分も何かに卓越するやうにならうといふ考を越さなければ駄目である。かういふ熱心と努力に耽るといふことが、人間が立派に生きてゆく上に大切な價值である。實際努力は、人間の人間たる價值をつける所

の標準でもあり、同時に人をして何事かを成就せしむる根本である。

嘗て大分縣に六三といふ男があつた、人々は常識の乏しい彼を「馬鹿」と呼んでゐた。其六三が或日のこゝ、自分の屋敷の中ころがつてゐた大きな石を運び去らうと決心した。何でも昔の立派な屋敷の残り物か何かで、恰好は面白いが、二三百貫もありさうに思はれた。彼が石を動かして居るのを見ると、人はそれが何の爲であるかをきいた。六三はいつもニヤ／＼と笑ひながら答へた。「鎮守様へ上げるのだ」

それをきくと少々は皆「馬鹿な」といつて嘲けた。六三はそんなことには人しもかまはないで、暇さへあれば其石をいぢつてゐた。

石は打見た所、五人や三人かかつて、とても動きさうにも思はれなかつたに係らず、六三が全身に力をこめてゑいや／＼とやるこゝ、何物かの力に助けられでもしたやうに、それがそろ／＼と動いた。一ヶ月も経つた後には、それが

十間餘りも隔つた道路にまで移されて居た。それを見た人々は、不思議に思つた。面白半分に彼に助をかさういふものがあつても、彼は頑としてそれを退けて、最初から終りまで、ゑいや／＼と獨りでやるこゝを樂みにした。その中にと／＼二年経つた。けれども六三はその石を動かすことを一日とても忘れたことはなかつた。そして村の人が大方六三の仕事を忘れてしまつた頃、その大きな石は、遂に馬鹿者六三の獨り手によりて、十町餘りも隔つた鎮守の社へ立派に運ばれて居たのである。

世間の人は、誰でも一心に物事に凝つてしまふと、よく「馬鹿」とか「氣狂」とかいふことがある。けれどもかういふ馬鹿や氣狂の中には、随分立派な大きな馬鹿や、感心な氣狂があることを忘れてはならぬ。吾々は世間の口位は何も氣にしないで、飽くまで信じたこゝを行ふことによりて、立派に其目的を果し得る場合が澤山ある。かういふ意味に於て、吾々は小さい賢者であるよりも、寧

ろ大きな馬鹿でありたいと思ふ。小賢しい小さい人間であるよりも、大馬鹿な氣狂でありたいと思ふ。目先ばかりをねらつた賢者よりも、山を移さうとするやうな愚公や氣狂が、却つて大きな成功をするものだからである。

九 己にも男の意地がある

男にこりて最も貴いものゝ一つは意地である。勿論女にだつて意地がなければならぬが、男に此意地がない時は、彼は女にも劣るのみか、全く人間さいふ價値のないものである。

「己れ、おれも男だ！」

此意地、此意氣地！これが即ち成功に導びき、人をして尊敬せしめ、感激せしめ、勇奮せしめる根源である。此意地によつて、マラソン競争に月桂冠を頂き、朝鮮語の研究に成功した青年のことは前に述べたが、更に英語の熟達に

成功した青年のこゝを述べて見たい。

此青年は嘗て師範學校の生徒であつたが、英語の成績不良の故を以て退學を命ぜられたのである。青年は此時始めて眼を覺ました。

「己には英語を學ぶ資格がないのだらうか、馬鹿々々しい、そんな可笑しいことがどうしてあるものか、高が暗記さへすればいゝ語學ではないか、己にも男の意地があるぞ」

かう叫ぶと同時に、青年は一冊の英和辭典を携へて、木曾川の畔の河原へ毎日通ひつゞけて、片端から辭書の中の字を暗誦にかゝつた。

「今に見ろく！」

かう思ひつゞ彼は不乱に勉強した。そして彼が辭典一冊を片づけ終つた時には、彼はもう高等師範に入學して居た。其の英語にかけては低能兒とまで呼ばれた彼は、今や高師の教授すら、其非凡な英語の力に舌を卷いた程になつて居

た。語學のやうな暗記を主とする學科に於ては、他から教へられるといふよりも、自ら學ぶといふことが最も大切であることが、此處にもまさしく示されて居るのである。

XIO まあ見て居ろ！

小賢しいものには、眼前の利益だけが見えて、遠大の計劃が分らぬ。これが即ち小柄巧なものが容易に成功せぬ理由であると同時に、人の批評などにびくともせぬ遠大の志あるものが、「まあ見て居ろ」と、ゆうく、努力して居る中に、遂に立派な成功を得る所以であると思ふ。

すでに三十年も昔、愛媛縣にまだ一の果樹園もなかつた頃のことである。或村の小學校に奉職して居たワイ氏は、節約によつて貯へた少しばかりの金で、村の隅にある横原といふ山を買つたのはまだいよとして、この荒廢し切つて居

る山の開拓を直ちに始めたのだからたまらない。

「馬鹿先生が何だか始めたが、一体何を植えるつもりぢややら」

村の人はこんなことを噂し合ふのみで、誰一人として、彼の此行動に對して嘲笑の眼を向けられないものはなかつた。けれども彼は平然として、殆んど毎日のやうに、此横原の山腹に、其野心満々たる體軀を運んだ。そして一畝ごとに滿身の精力をこめて打込んだ。

一日／＼山は開かれて行つた。夕方になつて、彼が疲れた身體を家路に運ぼうとして、靜に振りかへつて見た時、未來の成功を夢みる彼の心からは、喜びの涙が密かににじみ出るのであつた。けれども喜の未來は彼にとつては餘りに遠いものであつた。忽ちにして僅かな彼の資本は盡きた。それからそれと、彼の所有物は人手に渡された。村人は密かに「それ見たこゝか」といつて笑つた。彼が泣いて最愛の娘を奉公に出すこゝにしたのも此時であつた。彼の其頃

の生活は只涙の歴史であつた。それにも係らず、「まあ見て居ろ」といつて彼はどうしても初志を翻さないで、雨にも風にも、其姿を横原に現はさない日とはなかつた。

かうしてゐる中に望の時は勢よく流れて行つた。遂に彼の努力の報ひられる時はやつて來た。年々數萬貫の果物は伊豫の國の重要な産物の一つとして、國境の外に送られるやうになつた。ワイ氏は今や其昔を顧みてほゝゑみつゝ、數十人の傭人を使つてなほ盛に努力をつゞけて居るのである。

此に似た例は何れの世にも甚だ少くないが、次のも亦其一つである。靜岡縣の或村に、嘗て作兵衛爺さんといふがあつた。元來剛直な作兵衛爺さんは、單に眼前の利益にのみ囚はれた親族さもの忠告なき耳にもかけず、天城山に源を發する土肥川の畔の荒れた山を買ひ入れ、毎日く自ら其の山を開いて

は、杉や檜の苗を植えつけた。

年々河水が溢れては稻田が臺なしにされるのを防ぐには、堤防や蛇籠のやうなものでは到底見込がないと見てとつた作兵衛爺さんは、一村永遠の大策をたてるにしくことないと判定して、遂に獨斷でこれを斷行したのである。かくと見た村の人々は、餘りに氣の長い老爺さんの「まあ見て居ろ」の計劃を笑つた。その後杉や檜の林は年と共に盛えて、二十年を経た今日では、其以前年々の恐れであつた水害は全く跡をたつた。かくして村の人は今や水の危険を忘れてしまつたが、生ひ繁つた杉や檜の林は、年々の恐ろしい洪水を、巧に腕一本で支へた作兵衛爺さんの先見の明と、永遠をねらつた努力の跡を誇りがほに、力強い不斷の嘯きをつゞけてゐる。

山口縣美禰郡伊佐村にも、聊か之に似よつた話がある。此伊佐村は、俗には

一名を桐村といつてゐるが、其村の俗名こそは、今私が説かうとする美談が原をなしてゐるのである。

嘗て山口縣では、色々な植樹を奨励したことがあつた。成程面白からうから一つやつて見ようと決心した此村の某氏は、何年かゝつても善いから、桐の樹を五萬本ばかり村中に植附けようと決心した。といつて自分の懐から凡ての苗木を買出すことも出来ぬ氏は、頻りに勧誘しては桐を植えさせようとする、

「そんな厄介なことを云はれては困る」

といつて盛に不平を述べるものもあつたが、さうなると、氏は掌を合せて拜まんばかりにして、

「それでは私の方で植附けてあげますから、どうか植えることだけを植えさせて下さい」

といふ風にして、幾年もくゝかゝつて、遂に五萬本といふ桐を植附けること

を爲し遂げたのである、これを終ると同じやうなやり方で、氏はまた十萬本の柿の樹を村に植附けさせたり、接木させたりした。此努力が次第に現はれて、此村は現に日本有数の桐の樹の産地となり、やがては桐村とも綽名されるに至り、村人は氏の篤志に今更ながら感謝して居るのであると。

一一 今にわかる、今にわかる

我國の最も有名な瀑布の一つである華嚴の瀧をたづねたことのあるものは、誰でも知つてゐるが如く、今でこそ断崖つたひに細道を下つて、瀧壺の側まで近づくことが出来るのであるが、其以前瀧は高臺の上からでなくては見られなかつたさうである。それを今のやうな、危つかしいながらも崖路をつけて、下から瀧を仰ぐこゝの出来るやうにしたのは、全く五郎平爺さんの而も獨力の賜であるといはれてゐる。

その初め爺さんが、獨力によつて此路を開かうとするに、日光や中禪寺の人々は、口を揃へて嘲笑つた。

「立派な土木の技師でも出かけて行つて、測量をやつて、百人二百人の人夫でも使つて、半年も一年もかゝつて大工事でもやつたらばさもなくも、墓穴に片脚ふみ込んだやうな爺さんが、たかゞ鶴嘴や手斧でこち／＼やつたところで、五年や十年であの断崖がどうなるものではない。五郎平爺さん死に際になつて氣が狂つたのだ、可哀想に今に崖から落ちて谷底に呑み込まれてしまふだらう」

こんなことを云つて、人々は見向きもしなかつた。けれども五郎平爺さんはさうした嘲罵や笑聲には耳もかさなかつた。

「魂の力を見よ、靈の力を見よ、そこには神が宿つて居るのを知らぬか、人間は神だ、神は人間だ、人間を外にして神なく、神なくて人間はない。物の表面

丈けより見ることの出来ぬおはれなもの共よ、靜に耳を澄して魂の叫を聞け、

——努力せよ！ 只努力せよ！——精神は力だ、意志は力だ、まあ見て居るがいゝ、今にわかる、今にわかる」

爺さんの心は密かにかう叫んだ。そして爺さんは心の叫に勵されて、力づく、毎日朝から晩まで働きつゞけた。一樹の根を掘り、一個の石を轉ばすにも、爺さん一人の力では、十日も二十日も、時を計しては、一ヶ月も二ヶ月もかゝつた。それでも爺さんはコツ／＼、コツ／＼と働いた。時計が時を刻むが如く。時が時計を動かすが如く。そして寒い日も暑い日も、爺さんには少しも變りはなかつた。

「ゑいや！ ゑいや！」

爺さんの口からは、常に此言葉が繰返されるのみであつた。

三年以上の間、爺さんは働きつゞけた。かうして今の濠路が遂に五郎平爺さ

ん一人の手によつて成つたのであつた。路が出来上つたのを見ると、人々は驚歎の叫をあげた。

「感心ぢやな！ ゑらいもんぢやな！」

五郎平爺さんは、それをきくと

「ハハ、ハ、ハ」

ご元氣ある聲で只笑つて居た。其聲には自らの力を信することの出来ない弱者を笑ふやうな皮肉の音色が含まれて居た。

自らを信するものは強い、彼にあつては意志が即ち力である、成功である。之を知るが故に彼は只努力するのである。努力するが故に彼は勝利者となるのである。

一二 他人は遂に頼るに足らぬ

數年前「帝國巡回博物館」といふものを携へて、所々を巡回してゐる岡戸理七君といふ一個の元氣な青年があつた。君は元來尾張知多半島の生れであるが、家貧にして小中學も或商家に奉公しつゝやつこ業を卒へたのであつた。

やがて君は唯一の恩人たり後援者たる或有力者を喪ふことゝなると、一時は少からず悲觀したのであつたが、

「抑も他人に依頼しようとするからが間違だ、人は遂に自らの外に依頼すべきものはない、獨立獨行！ 此外に人生歩むべき路はない」

翻然としてかう悟ると、君は獨立自尊の權化として、明治の前半期をかざつた福澤翁の大精神に憧がれて、慶應義塾に入學し、給仕の生活をつゞけて漸くにして業を終へると、君は有ゆる就職口を見向きもしないで、もつて生れた腕と脚とを唯一の資本として、一臺の箱車をひいて全國行商の旅に上つたのである。

その後大凡十年の間、或は北海道に渡り、或は琉球臺灣に渡り、脚にまかせ腕にまかせて、君は天地を友とし山河を跋涉して、其間衣食の料に餘る金あれば博物の蒐集に費し、殊に琉球臺灣なごにては、苦心をつみ危険を冒して、生蕃酋長の調度なごを始めとして、蒐め得た品實に一萬餘の多きに及び、幻燈の映講また數百種の上に出てゐるさいふが、君の此等の蒐集が其數に於てまた其量に於て、必ずしも天下の耳目を驚かすに足らないにしても、吾々は其蒐集品の一品一物にも、猶ほ其奥底に獨立獨行といふ尊敬すべき大精神の眼覺しき輝を認めないでは居られないのである。

「他人に依頼するな、他人は遂に頼るに足るものでない、自らを信ぜよ、自らにのみ依頼せよ」

そこに進歩があり、發展があり、成功があり、勝利があるのである。そして只そこにのみあるのである。

自らを信じ、自らに依頼するものばかりが最後の勝利者である。

一三 不斷の努力、不屈の精神

清水式無砂精米機さいへば、今では可成に知られたものであるが、此發明者

清水廣吉君も亦、努力傳中の一頁を飾るに足る人物である。

君は我國中海を知らぬ國の一つである飛驒の國古川町の生れにて、代々打刃物の名工として知られた清水家の長子である。小さい時から發明的の才に富み、色々な專賣特許も受けてゐたのだが、いくら發明の才に富んだ脳も、一生山の中に埋れて居たのでは、遂に其才の充分にのばせる目當のないことを見るま、君は憤然として東京に飛出した。そしてその砲兵工廠へ籍を置いたのは、まだ日露戰爭最中のことであつた。

それから後の君は、傍ら職工として働きつゝ、一心不亂に密かに發明に向つ

て没頭した。いくら發明の才があるといつたところで、凡ての發明は決して一朝一夕に出來あがるものではない。君が重ねた失敗の回数も、到底百回や二百回ではなかつた。大丈夫らしいと思つてやつて見ると、形だけは甘く出來てゐても、機械は思ふやうに動いて呉れぬ。器械が動けば製作に費用がかゝり過ぎる。かうして君はくり返しくする中に、食ふにこまり、居るに家なき悲境に陥つたこと、實に幾度であつたか知れぬ。けれども君は幾度失敗したからとて、食へなくなつたからとて、一旦思ひついたことを決して中止するやうな男ではなかつた。その度ごとに、却つて元氣を出して努力した。努力は君の生命であつた。不撓不屈は君の全精神であつた。かうして工夫を凝らしては試験を重ね、やり直しては改良を試み、油の汗をしほり血の汗をしほつて、遂に成就したのが此精密機であつたのである。不斷の努力、不屈の精神、此二つが遂に君の爲に成功の花を開かせたのであつた。

一四 短い一生に永い仕事

世人の嘲笑を的に一心の努力をつゞけて、華嚴の瀧路をつけた五郎平翁さんの奮闘もゑらしいものだが、「短い一生に永い仕事をやつて見よう」と心に誓ひながら、巖手縣のケイ町から、海岸に通ずる松坂街道を、切開くことに成功した松坂伊藏翁さんの努力に對しても、私は敬意を表しなければならぬ。其以前、海岸と町との間に突つ立つてゐた山は、交通の上に甚だしい不便を感じさせて、折角とりたての魚も町へ運ぶまでには腐つてしまふ位で、山一つが文明の進歩を妨げることを願しく、

「あの山さへなければねえ」

こは、旅人ばかりでなく、附近住民の久しい昔からの呪ひの聲であつた。久しい間考へた末、伊藏翁は遂に奮然として起つた。

「よし、短い一生に、あの山に一つ路をつけてから死なう」
いくら金があつたとて、死の旅に出かけるときに、自分からそれを持つてゆくことが出来ぬと知つてゐる翁は、道路開鑿の爲に、どん／＼と金をつぎ込んだ。

けれぎもさして掛つて見ると、思つたよりは金がかゝる、仕事はなかく捗どらぬ。逃げ出さうとする人夫の足をとめる爲には、増賃金がある。僅か二丁ばかりに三年もかゝつた處もある。かうなると人々は其成功を怪みながら、

「狂爺さん、火のやうになつて大仕事を始めたが、最後まで續くだらうか」といひ合つた。翁は只苦笑しながら、一心をこめて、自ら鍬を打ち込みつゝ督勵した。長い／＼三十年はいつの間にかたつてしまつた。街道は遂に立派に出來上つた。漁村はお蔭で立派な港にさへなつた。かうして安心した翁は、數年前八十五歳で死んだが、翁の目ざましい努力の跡は、なほいつまでも／＼、ひ

そかに其の不撓の精神をさゝやきつゞけてゐるのである。

一五 苦しければいよく努力

五郎平爺さんや、松坂翁の不屈の精神と、不斷の努力に優るとも劣らないのは、臺灣衛戍病院の小使オー君のそれである。

現に澎湖島媽宮のケイ門から、城壁の外側に沿つて、二丁ばかり走つてゐる二間幅の道路は、十數年の昔は僅に一人が通れるに過ぎぬ位の困難な小路であつたが、君はその有様を見ると、「何とかして一つ路をこしらへて見よう」と思ひつゝ、烈しい勤務の暇の時間を利用しては、朝に晩に獨りでコツ／＼とやり出した。やりかけて見るとなかく／＼に骨が折れる。けれぎも君は尋常一様の意地張りではない。骨が折れ／＼ば折れるほど、苦しければ苦しい程、いよく懸命になつて努力をつゞけた。

「一体どうしようといふのだ」

人々は斯ういつてつぶやいた。

「おぢさん、何時になつたら出来るのだい」

知つてる人々はこんなこともいつた。けれど君は、只笑ひながら

「さらばのう」

さいつたきりで、何も云はなんだ。人が何とかいへばいふほど、黙つてゐる君の決心はいよく堅固になつた。そして益熱心になつて、之に向つて精神を集中した。月二回の公休日などは、君にとつては此上もない、路づくりの爲の喜の日であつた。そして君は狂人がにやりくと笑ふやうに、五寸一尺と出来上つてゆく、見事な道路を見ては獨りニコニコした。

いつの間にか十年たつた。大正七年の夏、君は遂にその仕事を完成して、漸く汗をふいた。これを見た總督も驚歎した。そして感状を贈つて表彰をしたの

はいふまでもない。けれど君の美しい精神と、不斷の努力の魂とは、その感状や表彰位ではめ足るものではない。人間の進歩、人類の向上、其處に向つて其力と魂とが、小さいながらも敏どい眼を見はつてゐるからである。自動車、車の笛の音をきいて氣持の悪くなる私も、かうした隠れた美しい精神と、不斷の努力の姿とを見る時に、私は心の奥底に力強い喜を感じないでは居られぬのである。いなそれは決して私ばかりではなからう、眞に美しい心をもつたものは、私と同じやうな喜を感じて、新なる努力の路を開かうとするであらう。

一六 本を引裂きながら勉強す

英語の力が足りないので、英和辭典を片はしから暗誦にかゝつた青年の努力は前に記したが、同じ英和辭典の記憶に努力した例ながら、此はまた昔の人に效つて奇抜な方法をとつた青年である。

彼の記憶法は、一生懸命になつて一頁を記憶するなり、直ちに其一頁を引裂くのである。もう大丈夫だと思ふと二頁でも三頁でも思ひ切りよく引裂いた。何も引裂かなくともよささうにも思へるが、引裂かないで置くと、必ずあとに依頼心が残るのである。依頼心が残ると努力が足らなくなる。彼は即ち依頼心を除かうとしたのである。かうして彼は本ばかり大切に、何も覺えない意氣地なしは、全然反對の方法をとつて、再び見られないものだ、心に誓ひながら、勇敢に引さいたのである。彼は今は支那の陸軍大學で、日英獨語の語學の教師をしてゐるといふが、實際彼は此の他に露佛語及び支那語にも精通してゐるさうである。

一七 「言海」を書寫して暗誦す

大阪明星中學校の國漢文の教師をしてゐる林正治氏の勉強も、やゝこれと似

たものである。氏は其昔大阪に堂島中學といふのがあつた時代、其學校で體操の教師をしてゐた。

その頃の氏のポケットには、何時でも例の有名な國語辭典「言海」の寫しが幾枚となくはいつて居た。暇さへあればそれをポケットから出して見て居たのである。字引の一頁／＼を引さく代りに、君は字引を寫しては、それを暗誦したのである。其頃天王寺に住んで居た君は、そこから堂島までの往復にも、懸命になつてそれを見て居た。

五六年の後には、君は「言海」を片ぱしから暗誦し終つて居た。やがて君は中等教員の國漢文試験を受けると、一回で見事に合格した。其後君は堂島中學から堺中學に轉じて、二十年間一日として缺勤しなかつたといふ、努力家である。君はよく生徒に向つて、

「かうしたいと思つたら、直ぐにそれを實行すればいゝ」

どいつてゐるさうだが、今でも君は質問者に對して、
「それは『言海』の何頁にある」
とよく云ふさうである。

人間の力も此處まで來ると、神もお辭儀をするだらう。

一八 五十四歳で醫者になる

現に東海道の或る町で醫師をやつてゐる或老人が、一大決心をして醫師にならうとしたのは、君が三人の子をもつた三十三歳の時であつた。

もとく君は米屋の息子であつたが、一生米屋の息子で終るのが物足らなくて、醫師にならうと、思ひ切つて土地の醫者の家をたづね、先づ解剖學から勉強し始めて、三年の後には遂に其處の書生にして貰つた。三十七歳の老書生が、かうした生活を、鼻垂れ小僧ごもから嘲笑されることは、随分つらい思ひであつ

たが、君は齒を喰ひしばつてそれに堪へた。

「そんなここに堪へられぬやうで、最初の目的がさうして達せられる？」

君は、かういつてわれとわが心の弱さを叱つては、暇さへ見れば、本を手から放したことはなかつた。四十歳の春になつて、君は始めて開業醫の試験に應じたが、いふまでもなく見事に失敗した。けれどもそれは最初から君の覺悟をしてゐる所であつた。其後も受ければ落ちる、受ければ落ちるした。それでも君は落ちる毎に、一層元氣を出しては、益命がけになつた。

「まだ研究が足らぬのだ、足らぬのだ」

かう叫んで君は誰を怨むでもなく、ひたすら自分の努力の足らぬことを自ら叱りつゝ、いよく火のやうになつた。前後八年間に、丁度十六回落第した。そしてやつと前期の試験に合格したのは十七回目の春の試験の時であつた。すると君は一層の力を得て、

「まだ研究が足りないんだ、足りないんだ」
をくりかへし、後期實地試験も五年がよりで、五十四の春にやつと大目的を達した。そして今は専門學校出の長男と共に一個の病院を經營してゐるのであるが、君の努力もまた模倣するに足るものだと思ふ。

一九 人の悪口が原動力

五十四歳でやつと醫者になつた老人とは、聊か其動機がちがふが、或市で今大きな眼科病院を經營してゐる池田宗吉氏も、十四年かよりで眼科醫になつた人である。

もごく君は片眼の見えない、あはれな不具者であつたので、不自由で悲しくてたまらないに加へて、小學時代から、友達等は君を「カンチの宗吉」といふ代りに「カン宗」を綽名して、何かといへば「カン宗、カン宗」といつて、からかつて居た。此言葉を耳にすると、君はなさげなくて、腹がたつて仕方がなかつた。その悲しさ腹立しさは、いつか他の不具者に對する同情となつて現はれた。

「眼障者にならう、そして眼の悪いものを直してやらう」

君はかう決心するなり、小學を卒へると、自らすゝんで醫師の家へ子守に住込んだ。その中に君の堅い決心は、遂に君を其處の書生にまで引きあげた。かうなると占めたものだ。君はコツ／＼片眼を本の上にすりつけて勉強を始めた。ふとして心にたるみでも出来るやうなここがあると、君は

「カン宗」

の一語を思ひ出した。そして君はぐい／＼と魂を引しめた。けにや十四年の間、君を努力させ勉強しつゞけさせた本當の原動力は、實に此「カン宗」の一語であつた。

考へて見ると、只一片の悪口であるが、それが魂を張りつめさせて、君を此處まで導びいたことを思ふと、いくら人から刺戟の語をあびせかけられても、只怒るだけで、一向に奮ひ起つことの出来ない人ほど、あはれなものはないからう。

二〇 夜も四時間以上は寝ぬ

これも人の悪口が刺戟となつて、努力の果に成功を得た一例である。伊豫の今治町を去ること一里許り西に、越智と云つて村で一二を争ふ資産家がある。此家の主人は三十年前頃は、今と反對に村一番の貧乏人であつたが、それが今の資産をつくり上げるまでの努力は、投機で儲けた成金もちがつて、人の心を動かさないでは居ないものがある。

其昔君が或農家へ雇はれて、夕食を食つて居た時のことである。君は其家の

構造をつくくくと眺めながら、

「二生の中には、私も一度はこんな結構な家に住んで見たいもので御座りませう」

と歎息するやうに云つたのであつた。とそれをきいて居た主人は嘲笑ひながら

「鶏が歌ふて夜が深いよ」

と云つた。君の希望を一片の寝言を見たのであらう。主人はやがて大きな聲をあけて笑つた。主人の言葉と笑ひを耳にした君の腹の中はさんなであつたらう。君は大きな金槌で、頭の天邊からなぐりつけられたような気がした。君はすぐに箸をなけて其儘家に歸つてしまつた。そして一晚中泣きあかしたのであつた。

それからの君はみるく人か變つた。氏神祭であらうが、祝ひ日であらうが

君は人の遊んで居る間にも、鋤をかついで田に行き畑に行つた。夜は四時間以上を寝ることはなかつた。草鞋をぬいで床に入ることも殆んど少ない位であつた。夜も繩をなふとか、筵をあむとか、まるで油の乗た器械のやうに働いた。たまへく妻君が豆腐でも買はうとするこゝ

「豆腐一丁買ふ金があれば、豆腐の大ききの土地が、地の底の底まで買へるぢやないか」

かういつて爪に火をこもすやうな勤儉な生活をつとけた。とても人間業とは思はれぬまでの君の努力を見ると、妻君も遊んでは居られなかつた。良人と一處に骨が碎けるまで働いた。母親も夜遅くまでぶりくミ絲をつむいだりした。

天は自ら助けるものを助くで、君の不撓の努力は次第に酬ひられて行つた。君の一心はいよく火のやうに燃えた。そして君の家の資産は、いつの間にか

努力運は以外には無い。毎日の早寝早起
天は自ら助けるものもつを助く
運は来るとあり

その昔君をあざけつた農家の主人のそれを凌ぐやうになつて居た。

二二 體さへ運べば幸運は来る

今治の越智氏には其動機を異にすれども、これも裸一貫から數十萬の財産をつくり上げた努力家の話である。此の努力家は其姓を田中といつて、今も千葉縣の八街驛から、時々汽車に乗る姿を見せて居るが、さうした時でも老人はいつても菅笠に吳産を引かけて居るのである。

此老人が奥州から流れて、下總の一村に腰を下ろしたのは、五十年前のことだ。ここで、この老人はいつも口癖のやうに、

「運といふ字は運ぶといふ字だ、體さへ運べば必ず幸運は来るものだ」といふのであつた。そして雨が降らうが雪がふらうが、老人はまるで器械人形かなんかのやうに、働きつとけて體を運ばして居た。それで居て酒一滴飲む

でもなければ、煙草一ぶく吸ふでもなく、十年の間に老人が貯蓄した金は可成いかにに少くなかつた。相當に金が出来ると、老人は忽然今までの鉄をなけすて、確かな目論見をつけて製材業を始めた。そして相變らず不斷の努力をつゞける中に、さんくと油か乗つて来て、遂に今日の大きな富を積むに至つたのだといふが、それでも東京へゆくにも何處へ旅をするにも、昔からの心を忘れずに菅笠と吳産を相變らず身にまとうて出かけるのださうである。つまり老人のかうした心懸と努力が、此人に今日の幸福の土臺を築かせたのであるはいふまでもない。

一三二 一圓の金を千倍にした今二宮

數年前静岡縣志太郡長古澤俊次郎氏が、「我が愛する青年」云ふ小さい本を公にして、天下に紹介した一人の模範青年がある。それは同縣富士郡須津村

中里の豆腐業後藤寅吉の長男銀作君のことで、銀作君今年は最早二十八歳である。

君の家にはもと宅地七畝があるのみで、君の下には兄弟八人もあり、おまけに父が病身なので、小さい時から君は可成に家の手助を怠らなかつたが、それでも尋常科を卒へて後、高等科も補習科も卒へ、其間僅かに二日間缺席しただけであつた。

「ところが君は「今二宮」と呼ばれてゐるだけであつて、小さい時から勤儉貯蓄の路を知り、最初三十六年尋常一年を卒つた時、村醫菊池氏の奨學金五十錢を得、親戚から貰つた五十錢と一所に貯金して、小學卒業までにそれが二圓拾五錢になつたのを巧につかつて、今日では一寸した財産を自分の腕の努力一つで作らあけたのである。

今試みに銀作君が此二圓拾五錢を如何につかひ、如何にしてその財産をつく

りあけたかを述べて見るに、或時學校の先生から養鶏の利益あることをきいた君は、この金で鶏の雛三羽を求め、残った金で卵の行商を始めた。そして十ヶ月の後にはこの鶏を三圓五十錢で賣り、其金で更に小豚を二頭買ひ入れ、また十ヶ月を経てその豚を十圓に賣り、かうして小豚を買つては大きくして賣る事二回に及び、利益金三十八圓となつた時、父親から七圓だけ都合して貰つて、四十五圓を以て隣家から馬を一頭買つた。二個の五十錢銀貨が、鶏になり、卵になり、豚と化し遂に馬と變つた。是が銀作君が學校を卒へた十六歳の時のことであつた。

此から後の銀作君は、父にすゝめて豆腐屋を廢業し、農業一方を勵むこととなつた。かくして努力奮闘の新しい生活に入つた銀作君は、全く猪武者のやうになつて働いた。

明治四十一年には君は畑一段六畝を十六圓で買ひ、之を開墾して茶を植えつ

け、やがて之を二十圓で人手に渡し、此金に無盡金百六十圓とて、茶畑一段一畝を買ひ、翌年また荒地四畝を十三圓五十錢で買入れ、之を開墾して茶畑とした。かうして次第に財産をふやしてゆく中に、在來の宅地七畝の外に、畑地は六段二畝廿二歩となり、また物置も建築し、小作は田九段八畝、畑五段七畝に及んだ。

銀作君は徴兵検査の結果甲種に合格したが、丈けが低い爲に輻重輸卒となつて、大正五年二月二十九日豊橋第十五大隊に入營した。在營の間君は上官や同僚に愛されたこと尋常でなく、除隊後も、まめやかに一心不亂に農事を勵んで、時間の勵行や、規律を正しくすることや、物を整理することや、清潔を重んずることや、長上を尊敬することなど、今猶全く入營當時に訓練された通りに實行して、模範青年中の極めて優れたものとして、廣く尊敬を受けてゐるさうである。

一三三 苦學の汁粉屋と牛乳配達

人間の命は、いくら長く生きてとて、今日では百の上に出ることは珍らしいことである。理屈の上からは九百位までは生きられることになつて居るが、それは今日ではまだ空想にしか過ぎない。かうして人間の命は矢張短かいものだ。すると、苦しんで死ぬるのも一生、樂をして死ぬるのも一生、苦しむのは馬鹿氣きつてるといふものがあるかも知れぬが、それは前にも述べた通りに、人間の一生をあたたら犬猫同様に終らうとするものゝ云ふことで、少しく人間の目的いふことを考へる力をもつた立派な人間は、決して相手にしてならぬ考である。人はどこまでも苦しむことによりて自分を完成し、努力することによりて、國家社會人類に對して、力の限りを盡すべきことを忘れてはならぬ。この意味からいつて勞働といふことは人間に最も大切なことであり、苦學と

いふことにも深い尊い意義があるのであつて、殊に苦學の功成つて一段落のついたものは、自分にとりては非常な喜であるべく、また引つゞいて努力をつゞけることによりて、その人はいよくゑらしいものであると思ふ。勿論苦學の成功者を求めれば、常に可成に澤山あることであらうが、大分縣佐伯町の廣瀬正雄君や、宮城縣黒川郡大松澤村の佐藤伊七君なども、苦學の成功者としては一筆を價するものだと思ふ。正雄君は年二十歳の時に、既に中等學校教員修身科の檢定試験に合格したが、そんなことには君は満足することは出来ないで、やがて一文なしで上京して、新聞配達をしたり、資金の少くてすむ汁粉屋をやつたり、いろいろな勞働をしながら、中央大學の法科に通ひ、其後學年試験に優等で首席を占めて學資金を給せられることとなり、傍ら妻君が内職から得る収入とでもつて、懸命に勉強した甲斐があつて、先年辯護士試験に及第したのであつた。

また伊七君は、小學卒業の後、暫く獨學で勉強して、日本大學の法科に入り、二十一歳の時それを卒業したのであつた。ところが嘗て故小村侯爵家に書生をして居たことがあつたので、君が卒業後、今の小村欣一侯も君に寄宿することを勧めたのであつたが、どこまでも獨力でやり遂げたいと思つて居る君は、其勧めを潔きよく辭して受けず、小石川原町の寂園寺の一室をかりて牛乳配達をやりながら熱心に勉強をつづけ、判検事試験を受けて、遂に先頃首尾よく合格したのであつた。願くは此人々が一生の間最も眞面目な意味に於ての努力をつづけることを祈らすにはあられない。

二四 至孝至誠の頌徳碑

鹿兒島縣始良郡國分村の、長崎金左工門氏の至誠至孝の美しい生活も、また此書の一頁をかざる値のあるものである。

君は既に五十に近い人であるが、父の金次郎は、君が七八歳の頃からリウマチスにかゝつて手足が自由にきかず、それが爲に君は子供の時から、學業の餘暇には母を助けて田野に耕さなければならぬ境遇にあつたのである。ところが君の十四の時、君の母は不幸にして病死してしまつたので、病父をいだいた君はほとく當惑したが、勝氣の君は悲の中にも健氣な決心を起して、夜の明けぬ中に飛起きては食事を整へて父にすゝめ、小さい腕一本で農事にいそしむ間には、山に入つて薪をとつて來ては金にかへて、父の好きな焼酎や肴をすゝめたり、夜はまた父の足や腰の按摩をしつゝ、四方山の話などをしては慰め、父が寝た後は草鞋をつくり繩をないなごして、二十年間一日のやうに孝養の限りをつくしたのであつた。

やがて君は二十六の時妻を貰ひ受け、三男二女をあけて夫婦仲も至つて睦まじかつたが、大正二年の冬妻は死亡し、其翌年の夏また父に死なれて、君は重

ね／＼の不幸に一時甚しく落膽したが、それでも一年の間は毎日父の墓に参ることを怠らず、亡くなつた父に仕へることが丁度生前少しも變らなかつたのであつた。

かうした一方に君はまた甚だ慈悲心が深く、公德心に富んで、公共の事業につくしたことも少くなかつたので、遠近の人々皆君の徳をしたひ、君の至孝の誠心は其筋にもきこゑて、明治三十七年の秋には綵綬褒章を賜はり、二三年前にはまた國分村に君の頌徳碑さへ建てられたのであつた。此名譽、此徳望こそは、とりも直さず、君の誠心と努力が咲かした花でなくて何であらう。

二五 至誠遂に祖父を改心さす

それとこれとはまた聊か趣を異にするが、同じ至孝至誠の心が、遂に祖父の心を改心せしめた一例がある。

祖父さんはもう善い年をして、毎日／＼酒を飲むことばかりを樂みにしてゐた。さなきだに貧しい家の生計がいよ／＼苦しくなるのを見ると、少年は一心になつて祖父さんを諫めるのが常であつた。と祖父さんも、たう／＼うるさくなるがためか、其時だけは「よし、ぢあやめる」といつて誓ふやうに云ふのであつたが、もと／＼それが本心かち出たのでないので、直ぐにまた居酒屋に走るのが常であつた。

或冬の寒い晩のこゝこである。祖父さんは寒さうな顔をして、富士山の麓の或る居酒屋の暖簾をくゞつた、やがて、彼はいつの間にか一升の酒をべロリさなめてしまつて、蛇のやうな舌で唇をなめまはしながら、更にまた五合をつけてくれと云つた。

丁度其處へ駆け込んで来たのは、孫の少年であつた。少年は例の如く祖父さんの腕にまづはりついて諫めた。そして遂に盃も徳利も奪いこつてしまつ

た。と祖父さんは火のやうになつて飛立つたと思ふと、可哀想な少年を土間に投げつけて蹴りとばした。少年は飛び起きて祖父さんに武者ぶりついた。祖父さんは又しても少年を投げた。かうして投げられれば飛付き、飛つければ投げられしたが、少年はへとくになるまでそれを繰返した。酒屋の人々も遂に見ては居なかつた。そして少年に同情して、頻りに老人の飲酒をさへぎるやうに努め出した。

少年はかうして時々祖父からひきき目に遇はされ、体中には殆んど生疵の絶え間がなかつたが、どうかして祖父の飲酒の癖をやめさせよう、さうして一家の生活を出来るだけ安らかにしたい、それが爲には命をかけて祖父をいさめよう、かう思ひ込んだ美しい少年は、日に夜かけて、心を碎き神に祈りつして、手をかへ品をかへて祖父をいさめた。

少年の誠心は遂に祖父の心を動かし、努力の功は現はれた。祖父さんはふつ

つり酒を思ひ切つて、次第にやさしい心にさへなつたと傳へられてゐる、少年といふのは、今模範青年と稱へられてゐる菅沼元治君のこゝこである。

至誠神に通ずるこゝか、または天に通ずるとか、或は鬼神も之に感ずとかいふのは、君のやうな純一な美しい心の努力をいふのであらう。

二六 隠れたる天才音楽家

昨年きねんの末すえ、米國べいこくから歸つて來た我が音楽界の名手に、石川義一いしかはぎといふ人があ
る。君は福島縣の相馬中學を出るこゝ、旅費だけたづさへて、飄然として米國に
渡つた。そして十三年の間頼るべもない他國に於て、血の出るやうな苦學をつ
ゞけて音楽を研究した。

音楽といへば、學問の中でも最もむづかしいものゝ一つである。日本ではま
だ、本當に音楽家らしい音楽家は數へる程しかないのである。それなのに、石

川君は米國で音樂を研究して、「天の岩戸」をいふ日本の古い歴史を歌つた大きな曲をつくつて、非常に賞讃を與へられ、日本人がまだ與へられたことのない「パチエラー・オブ・ミュージック」といふ稱號をさへ大平洋大學から受けたのであつた。君の名譽は素晴らしいものといはなければならぬ。

けれども私が石川君をゑらい人として感心してゐるのは、君が此「パチエラー・オブ・ミュージック」即ち音樂學士とでもいふべき稱號を得たといふことではない。君が「天の岩戸」のやうな大きな作曲をして、米國人を驚かしたといふことがゑらいと思ふのである。いなく、君は日本に歸つて來てから、立派な音樂上の才能を認められないで、日本の音樂學校の卒業生でないといふ所から、日本の音樂界から殆んど顧みられないで、不幸にして相變らずの貧乏をしてゐながら、誰をうらむでもなく、獨りでコツ／＼と不斷の努力をつゞけてゐる所が、私には非常にゑらいと思はれるのである。涙が出るほど嬉しくてならぬのである。

或時君は一記者に語つて、

「私は此寒さに、足袋もはけない始末です、でも貧乏が却つていゝ作曲をうませさうです」

こいつたといふが、立派な才能をもちながら、それを敢て自ら天下に賣らう／＼とこして、いやしい商賣根性を出さず、コツ／＼と努力し懸命に勉強して、どけてゐる君のやうな藝術家に對して、私は心からのあこがれの念を禁ずることが出来ぬのである。惟ふに、君のやうな立派な腕をもつた人は、遠からず世に認められることであらうが、かういふ人を早く受け入れることの出来ない日本の國は、まだ餘りに貧弱だとしか私には思はれないのである。

二七 死んでも勝つて見せる

群馬縣下の体育界に非常な貢献をしつゝある某氏の前半世も亦、努力史の一行を充すに足るものである。

明治三十五年の夏から一年餘りの間は、君は上州四萬温泉路を通ふがた馬車の馬丁として、頬をふくらしながらブブーくと笛を吹きつゝ、暇を見つけては或中學會の講義録を續んでゐた。が、やがて君は憤然起つて東京に出て、苦學の傍ら日本体育會の學生となつた。そして皆人のしまり？ない四年の生活の間に、君一人は黙々として只一心不亂に、肋木に鐵棒に跳越臺に、狂人と思はれるまでに懸命の努力をつゞけたのであつた。業終へてから後の君は縣下青年の体育上に大刷新を加へようとして、靜はコツ／＼と不言の實行を試みた。君のその不斷努力の功は、眼に見えぬ大きな底力の一つとなつて靜かに流れつゝ、人知れず人間の世を益しつゝあるのである。

運動さへいへば、既に十餘年前、嘗て水戸中學ミ宇都宮中學とが、關東野球界

に覇を争つてゐた時のことである。二年續けて負をとつた宇都宮軍、はやがて熱烈な練習をつんで水戸軍に戦をいさんだ。此時水戸軍の正投手は、不幸にして肩をいためて駄目になつてしまつたので、補缺であつた十六歳の少年名越君がその後任として立つことゝなつた。

君は體も小さければ、技倆とてもさして優れてゐるでもなく、それに試合の期日も一ヶ月後に迫つてから練習を始めたのであるから、水戸中學では先づ大體に勝算はないものとして、氣勢甚だあがらなかつたのも無理はなかつた。けれども名越君も一個の男兒である。全校の危ふんだやうな聲を耳にすると奮起せずには居られなかつた。

「死んでも勝つて見せる」

君は心にかう誓つて、熱鐵のやうな練習を始めた、學校では日の暮れるまでやる。うちでは毎朝矢場的に向つて百つゝの投球を試みた。かうした熱心な

練習は見る／＼君を物凄い投手に仕上げてしまった。

かくとも知らぬ宇都宮軍では、敵をあなざつて戦は臨んだ。ところが案の外に、小男の投手は最後まで怪腕を振つて、ぐい／＼と敵をなやました。組み易しと敵を侮つてかゝつた宇都宮軍は、又しても無惨な負をとつて、悲憤の涙を呑まなければならなかつたさうである。

おゝ、「死んでも勝つて見せる」！ 何といふ美しい見上げた決心であらう。覺悟であらう。此決心、此覺悟、之に導かれた努力は、人をして神の力をつかませるのである。神をして人に取りうつらせるのである。何の成らぬことがあらう、出来ぬこゝがあらう。

二八 努力は人を輝かす

運動と熱心と努力といへば、嘗て「オリムピック競技の實際」といふ書を

著はして、斯の方面の權威として知られた野口源三郎氏のこゝを渡らすことは出来ぬ。

君が今の名聲を得るに至るまでの努力は、決して一通りではなかつた。氣狂ひかと思はれるまでは、毎日／＼百米突だの、幅飛だのから、高飛び、棒飛び、砲丸投げ、それからそれと油汗の出るやうな練習をつゞけた。そして朝はまだ工場の笛が目を覺まさぬ頃から練習を始め、そのひま／＼には學理の上から研究をつんだ。努力と熱心とは、君が不得意の棒高飛も見／＼上達させた。かうして二三年前東京芝浦の海岸で開かれた東洋オリムピック大會に於て、君は見事に十種競技の一等を得て、世界的選手の中に數へられるに至つた。此時君は友人等に向つて云つた。

「これも只練習のお蔭だよ」

さうだ、全く練習のお蔭である、努力と熱心のお蔭である。努力は人に輝

きを與へ、隠れて居たものを光らせてくれる。努力もなく苦心もなくして、自分がかような立派な腕をもつてゐるかを、遂に知らずに死んでゆくほどの氣の毒なものはないからう。

二九 輕蔑されて奮勵す

大正七年の春の始めの頃であつた。私の知つてゐる或小學教教師の友人の處へ、或日の夕方、三十餘りの、風采の立派な一人の紳士がたづねて來た。紳士が差出した名刺を見たが、友人にはどうもそれが思ひ出されぬ名であつた。知つてゐるかとも思はれるやうであつたが、知つて居ない人のやうにも思はれてならなかつた。友人は自分から立關へ飛出して見た。けれども何だか見覚えのない人としか思はれなかつた。で、友人が怪し氣な顔をして居るに、紳士はいつた。

「私は其昔△△の小學校で、お世話になつたことのある佐藤です」

友人はいよ／＼分らなくなつた。彼は一層變な顔をしながら、首をかたけて考へ込んだ。ミ、紳士はまたいつた。

「實は私は、あの頃小使をして居りましたのです、御記憶は御座いませんでせうか」

此聲を耳にするに、友人はぎく／＼とした。さういへば、その頃佐藤といふ男が居つたやうだつたに、友人は臆ろけながら、當時の記憶を呼び起して、何だかなつかしいやうな、きまりの悪いやうな氣がするものゝ、それにしてもその佐藤が今何しに來たのだらうと、何だか自分よりは立派になつた様に思はれる彼の風采を怪みながら、座敷に通らして暫らく話し合つた。

やがて佐藤の語る處によると、友人は其頃
「小使の癖に何を生意氣をいふ」

といつては、よく佐藤を怒鳴りつけたものださうだ。その度毎に佐藤は腹が立つて腹が立つて仕方がなかつたが、何といつても使はれて居る身の悲しさにさうすることも出来ないで、嚙をくひしばつては憤慨したさうである。そしてどうかして此残念さが減きたいと思つて、佐藤は断然決心して、或る中學講義録をとりよせて、ひそかに懸命に勉強し始めたのであつた。「さうかして彼よりゑらくなりたく、」此が佐藤のその頃の望の全部であつた。

かうして僅かに尋常科を卒業したばかりの佐藤は、勉強したともく、全く器械の如く勉強をつゞけた。そして十五年かゝつて、それからそれと準教員の免狀から、小學教員全部の免狀を受けた。けれども佐藤はまたそれに満足することが出来ないで、進んで中等教員の免狀を得たいものと思つて、小學校に奉職しながら、引つゞいて日本歴史の研究に専心した。そして大正六年に至つて、首尾よくそれに合格するに同時に、中國の或師範學校に俸職することになつ

た。かういつて、彼はこれまでの自分の經歷を物語りながら、

「本當に今から考へて見ますと、あの頃あなたから、あゝいふ風に刺戟して頂かなかつたら、私は今日の私にはなれなかつたかも知れません。さう思ふと、全くあなたに感謝しないでは居られないやうな氣がして、久し振りで國へ歸りましたので一寸お伺ひしました」

といつたのであつた。友人は此時位るきまりの悪い辱かしい思ひをしたことはなかつた、と語つたことがあるが、云ふまでもなく、これなきも、美しい意地と努力とが、遂に天晴れな成功の冠をかぶらせたものこいふべきであらう。

三〇 誠心玉の如き一青年

北海道後志の國積丹郡余別村に、龜田龜一郎君と村田隆藏君といふ二人の青年があつた。此一青年の玉の如き奉公の誠心こそは、確かに傳へて世の青年の

士氣を鼓舞し發憤せしむるに足るものがあると思ふ。

龜田君は大正六年甲種歩兵に合格して、旭川歩兵第二十六聯隊へ入營するこ
ととなるに、會ふ人毎へ一家の光榮を説いて、

「入營したら一生懸命に勉強して、天晴れな奉公をしたいと思ひます」と語り只管入營の日をまつてゐた。

ところが其年十一月頃から、此地方にも例の流行性感冒がはやつて、月半ばかり君の両親も病に襲はれてしまつた。君生來孝心の深い君は、寢食を忘れて看病に力を盡した。その中に君も亦これに感染して、止まらない苦しさを覺えたが、間もなく入營する身であることを思ふに、徒らに騒ぎたてゝは、つまりが両親に心配をかけることになるかと考へ、君は自分が病氣にかゝつたことについて、決しておくびにも出さなかつた。そして入營の爲に出發する當日なごは、苦しさを包みかくして、こゝさら健氣さうな風を襲ひ、他の入營者と一所

に、村の人達の見送を受けて、勇ましく出かけたのであつた。

二十九日、旭川の指定の宿につくと、同じ入營者村田、藤谷の二人も、流感にかゝつて床につかねばならぬこととなつた。するに龜田君は自ら苦みを忍びつゝ、二人の爲に看病しながらいろいろと世話を焼いた、

十二月の一日になるに、龜田君の發熱はいよゝゝ烈しくなつた。そして今はもう歩くことさへ自由にまかせぬこととなつた。けれども君の精神は、此時弓を張つたやうに張りつめて居た。ふらふらとする体を自らさゝへつゝ、君は勇を鼓して兵營に行つて身体検査を受けた。軍醫は君の容體を見ると驚いた、可成に重態であつたからである。是に於てか、兎も角もと、軍醫は應急の手當をして、直ぐに郷里へ歸さうとしたが、其時君は容を改めていつた。

「私は軍人となつて、君國の爲に盡したいのが久しい間の願で御座います、それなのに、こればかりの病氣で歸されるといふのは、思ひもよらぬことで御座

います、何うか兵營の片隅へでも置いて下されませうやうに」

この詞を耳にすると、軍醫は美しい誠心に感動した。そしてその儘入營させて、直ちに衛戍病院へ入れたが、やがて肺炎を併發して、命は旦夕に絶えさうになつて來た。けれども君は

「一刻も早くなほつて勉強したいなあ」

といつて、その他には何一つ苦しさを訴へるでもなかつた。君の此最後の瞬間までも張りつめた誠心を見ると、さすがの戦友も袖をしほらすには居られなかつた。けれども此忠誠な青年も遂に天の助くる所とならないで、五日にはもう此世の人ではなかつた。

村田隆藏君も、十一月二十五日から感冒にかゝつて、甚しい發熱の爲に起きては居られなかつたので、両親は醫師に謀つて、入營の延期を願ふことを勧めると「一日後れると、一日丈け他人にまけるのだから、さうか定まつた日に入營さ

せて下さい」

といつて、君は眞面目に頼むのであつた。けれども實をいふと、君の病氣は到底入營なごの出來るやうな状態ではなかつた。

此ところが十一月二十八日には、村からの入營者は、皆熱心な人々に送られて嬉しさに出發したのである。最初から此日をねらつて、一計劃やらうとしてゐた隆藏君は、此日先づ時計を買求めるべく父に外出して貰つて、母の眼をぬすんで、ひそかに床をぬけ出し、獨りで停車場へかけつけて、夜汽車でこつそり旭川についた。かうして君が指定の宿についた時には、体温は四十二度になつて、既に肺炎さへ併發してゐた。折柄旅館を巡視してゐた憲兵は、君の此病狀を發見して、甚だ驚いたのであつた。

さて君の家では、急に君の姿が見えなくなつたので、驚きあはて、西を東へとさがしまわつた。そして遂に見當がつかなくなると、或は君のこれまでの態

度で見ると、ひよつとすると旭川へ行つてゐるかも知れぬといふので、二十九日君の父が旭川へ出かけて行つて見ると、果して君は宿についた儘でうんくとうなつて居る。かくて君は直ちに同地の或病院に送られたが、不幸にして、君は其翌日死去するに至つたのである。

龜田君と云ひ村田君と云ひ、一旦軍籍に身を入れることとなつてからの其態度の雄々しさ、健氣なさ、まことに神州の男兒の模範として敬服すべく、其赤誠とこしへは人を動かして己まゆものであると思ふ。

三一 軍隊教育の花

良兵にして始めて良民であり、良民にしてまたよく本當の良兵であることが出来るのは、一般に常に信ぜられて居るどころであるが、青森縣南津輕郡常磐村の高木儀十郎君の如きは、良兵である前から、立派な良民であつたので、從

つてまた、入營すると間もなく、良兵として優れたものであつた。

儀十郎君は既に兩親がなくなつて、戸主であり、十八歳の妹を頭に三人の弟妹をもつてゐるのであるが、君は小學校卒業後、産業組合に傭はれ、月九圓の手當を貰つて、極めて質素な生活をつゞけてゐた。君は元來勤勉率直な人である上に、常に精神修養につとめ、又普通學の獨習をつゞけて居たので、次第に世間の信用も厚くなり、青年團員としても早くから模範人物として賞讃され、村長からも村の人々からも、末頼もしい青年として信頼されて居たのである。かくて大正七年十二月、君は徵兵に合格して弘前歩兵第五十二聯隊へ入營したのであつたが、入營前から模範青年であつた君は、入營してからも我身を忘れて熱心に軍務に従ひ、その上尊皇の念甚だ厚くて、毎朝顔を洗ふと、すぐに皇城を遙拜することを怠らず、命令規則一として嚴重に守らぬことなく、また軍隊内ですべきことは、かつて上官の注意を受けたこともなく、困難な

ことでもあると、君は却つて「已れ見事にやつつけて見せるから」と、腕だめしでもするやうな固い覺悟でかゝり、一つとして立派に仕遂げないものはないといふ風であるから、間もなくして上官は勿論一同の認めるところとなり、第一期が終るに、第一位をもつて上等兵候補者にあけられたのであつた。

それにまた感心なここには、君は入營後一度だつて酒保に行つて飲食をしたことなく、入營七ヶ月にして金五圓五十錢を貯へたのでも、君が無駄な金を費ふことの如何に馬鹿々々しいことだかを、ちやんと心得て居たことが分るのである。さういふ風であるから、日曜などにも、君は減多に外出することなく必ず營庭を散歩したり運動を試みたり、または銃をもつて豫行演習をするなど、其行動一々模範的に、軍隊教育の花とまで賞められたのである。

三三二 夢中で郵便局に駈つく

古い諺に「塵もつもつて山となる」といふことがあるが、懸命の奮勵と努力の果に、五錢十錢の小使錢の中から節約して、八十圓の貯金を積むに至つた、中塚卓樹君の偽らない告白は、簿志弱行の意氣地なしをして、愧死せしめるに足るものであると思ふ。

中塚君は岡山縣上房郡水田村の生れにて、上水田青年團員である。君は五歳の時父に死なれ、元來が貧家に生れたのであるから、小學校も半途でやめねばならぬ始末にて、その母から一圓五十錢の旅費を貰つて、十七里を隔てた岡山へ飛出したのは、まだ君が十二歳の時であつた。

岡山へ出てからの君は、或商店に見習奉公を始めたが、何しろまだ山出しの小僧に過ぎないので、毎月の小使といつても五錢か十錢しか貰ふことが出来なかつたが、それでも君はその中から儉約に儉約を重ねて、郷里を出てから一年目に七十錢の貯金をしたのであつた。

やつとの思ひで七十錢の貯金が出来ると、君は天にでも上つたやうに嬉しく
 てたまらず、夢中で郵便局にかけつけて、其金を郵便貯金に預入れたのであつ
 た。中塚君は此時の心持を、其後告白して、まるで數十萬圓も手に入れたやう
 だつたといつてゐるさうだが、親の懐から樂々としほりこるのでなくて、自分
 で儲けた最初の金に對して、かうした心持の起るのは極めて自然のこゝである
 と思ふ。

それから後の中塚君は、面白くなつて、益々儉約をつゞけた。かうしてどうか
 して身を立て家を起したい、これが君の堅い決心であつた。堅い決心はいよいよ
 君を勤勉にした。やがて六年後には、君の貯金は拾一圓五拾錢となつた。其
 時の君は丁度十八歳であつた。

其頃君は不幸にして脚氣を患つて、どうしても轉地しなければならぬことと
 なる、君は一旦郷里に歸つたが、幸にして病氣は早く直つた。君が喜んで再

び飛出さうとする時、母に勧められて近所の郵便局の集配人になつた。集配人
 としての君の一ヶ月の給料は十四圓であつたが、君は其中半額の七圓は食費と
 して之を母に渡し、残りの七圓の中六圓を貯金して、一圓を雜費にあてた。

此頃君は青年團にはいつて、集配人としてのいそがしい勤のひまを見ては、
 一生懸命に勉強を怠らなかつた。人々は君の努力に熱心に舌を卷いた。やがて
 君の俸給は拾六圓になつた。すると君は食費として八圓を母に渡し、後の七圓
 を貯金して、雜費は例によつて一圓ときめた。そして郵便局へ奉職してから一
 年後には、君は六十七圓二拾錢を貯金し、前のと合せて、君の全体の貯金額は
 實に七十八圓七拾錢になつたさうである。

世の中にはよく金がないくさいふものがあるが、中塚君のやうにして節約
 に節約をつんでゆけば、所謂金がないといふ言葉も一種の贅澤であり、單なる
 口實にしか過ぎぬこゝが分らう。時間に於てもそれと同じことで、勉強しよう

にも「ひまがないく」「こいふのは、つまり食後の三十分や無駄話の十分間を利用することを知らないものゝことで、昔から、無駄につぶし勝ちである十分や五分づゝの時間を利用して、立派に成功したものが澤山あるのである。時間がないから勉強することが出来ぬなどいふのは、要するに怠惰者の口實にしか過ぎないのである。

三三三 十三歳の快少年南洋に雄飛

西本願寺の前法主大谷光瑞師は、世間の普通の僧侶のやうに、生きた人間の社會から縁の遠い人ではない。信徒からは、活佛様とまで尊敬される法主の職を、何の惜し氣もなく破れ草履をすてるが如くすてしまつて、色々の生々した國家的社會的事業を着々と實行しようとするゑらい人である。決り見である。現に南洋に於ても、富源開發策を講ぜんとして、南洋セレベス嶋を根據に、一大

事業を始めるに至つたのである。

けれども日本人をして、今後本當に南洋に於て活躍させるには、どうしても最初から南洋向の教育をして、南洋向の人物に育上げるより外はない、といふので、光瑞師の主義として居る天才教育を、南洋の土地とする目的を以て、其志望の青年五十人が先年全國から募集されたのであつた。ところが其應募者が五百餘人あつて、中から選ばれた五十人は、既に大正七年の夏出發したのであつたが、この五十人の勇敢大膽なる青年の中に、當時僅に十三歳になる一少年があつた。この少年こそは、即ち私が今此處に紹介しようとするものである。

この少年は其名を十河健一君といつて、香川縣高松市西通町の生れにて、其頃高等小學一年に在學中であつた。父は周之といつて、荒下駄職を業とし、なか／＼優れた腕をもつてゐるのであるが、とかく旅から旅に出て遊びがちで、家計は甚だ苦しく、母は健一君が生れると間もなく死んだので、君は祖母の手

一つに育まれて、至つて丈夫に生ひ立つたのであつた。

健一君は生れつき非常に柔順な性質で、一時父につれそつて居た繼母に對しても、甚だ柔順に仕へ、また時々ふらりと旅から歸つて、いろくも無理な注文もする父に對しても、更に口答へなどすることなく、父の機嫌のよい折なきを見ては、

「人間はさうせ此世に働きに生れたものだから、働くこゝだけは働かにやならんのだ」

といつて、學校で教はつたことなどから割出して、却つて父親を諫めたりすることもあつた。さういふ風な健一君の學校の成績が、いつも優等つときであつたことはいふまでもなからう。

ところでどうして此健一君が南洋行を志望するやうになつたかといふと、大正七年の二月十五日のことであつた。高松市二番町の小學校では、五年生以上

を集めて、吉田忠次といふ人が、南洋土産の講話をした。日頃地理の教師が話して居たことが土臺になつて、此講話は生徒の或ものに對しては、力強い刺激となつたのであるらしい。

大谷光瑞師の南洋行の志望者が募られたのは、丁度それから後間もないころであつて、二番町の小學校からも多數の志望者が出たが、多くは父母の不賛成に遮られて、結局受験したのは三人だけであつた。そして三人の中で、健一君だけが最後の合格者として残つたのであつた。

健一君は性質が温順であるばかりでなく、親があたり前でなかつたに係らず非常に無邪氣に而も活潑に快活に育つて來て、家庭内の行ひも稀に見る模範的であつたので、學校から善行賞を與へられたこともあつた。學科は地理や國語が好きな方で、綴り方も頗るうまいものであつた。

かうした僅か十三歳の少年が、父や祖母から勧められるでもなく、獨り自ら

志望して、遠く故國を離れて、風土すら全く變つた南洋の天地に行つて、勇ましく活動しようといふのである。何といふ健氣なことであらう。何といふ痛快なこゝであらう。五里や十里の旅をするにでさへ、父兄や家族の人々の手をかからないでは、安心して出て行けない人々は、この勇敢なる健兒健一君の話をきいて恥かしくはないであらうか。いな眞に世界も呑まんとする健一君の堂々たる氣力を見ては、五尺の男子もさすがに顔を隠さないでは居られぬものがあらうと思ふ。

序に健一君の出發について、祖母が語つたこゝいふ話は、健一君の人物を知るに足るものがあると思ふ——

「健一は二つの時から寢床に小便をとり放したことなく、大きくなつてからも今日まで、只の五厘だつて呉れろと申したことも御座いませぬ、先日も權現様のお祭に、私が、お餅くらゐはこしらへな、外聞が悪いと申しますと、物價が

高いからおやめ申すので御座ります。南洋へ行くなさいふことは、最初は冗談をいふて居るのかと存じて居りました。もう私も老體ですから、二度と孫の顔を見ることも出来ずまいが——」

これで見ると、健一君は貧乏人の子に生れながら、甚だすなほに育つたものと思はれるのである。

また健一君の出發の前夜のことである、愈々明日出發するのだと思ふに、健一君は嬉しくてたまらないのであるが、祖母や父はさすがに別離の情忍びがたくて、殊に父周之君が、後悔半分に、折柄たづね來つた人に語つた言葉は、殊に健一君の人となりを知るに足るものがあると思ふ。父はいつた——

「私は放蕩で、今に母親に苦勞をかけて居りますが、健一は親に似ぬ孝行者で私は旅から歸つて來る度にあれに諫められて居るやうなことで、面目も何もあつたものぢや御座りませぬ。健一は七八つの時から、洋服を着る、袴を穿くな

さし申し、二三年前からは、日本は人口が多いから、立身が出来ぬさし、學校で習つたと見へて理屈をいつて居りました。私は、高等を卒業したら、兵隊を志願せよといつても見ましたが、いやだといつて、さうしても南洋行をやめようといたしません。あゝしてまでたつての希望なのですから、せめて子供丈けは立派になれるやうにと思つて、眼の先の慾には迷はず、いよく腹をきめて、あれの決心を許した次第で御座ります」

さていよく出發する、させると決定すると、どうしても無くてならぬのは五圓の旅費である。洗つてもこすつても出ない中から、祖母は血をしほり涙をしほつて、孫の爲にとうく五圓をこしらへてやると、健一君は天にも上る心地で喜び勇むのであつたが、更に此報が四方に傳へられると、同情は君の一身に集まり、小學校長は洋傘を、受持教員は自分の洋服を仕立替へて、其他の職員一同は旅行用の籠を、といふ風に、いろいろの饒別を送つて、健一君の行を

盛にし、其他附近の有志の人々は、いろいろの品物や奨励の辭を贈つて、熱血の健兒を祝福したのであつた。惟ふに此少年が南洋に雄飛する日も遠いことではなからうが、世の中の、徒らに金なく、機會なく、傳手なく、方法なきをのみ歎いて、靜に活動と努力との素地をつくることを考へない青年に對しては、君の如きは模範的實例であることを私は力強く警告したいと思ふ。

行け、滿天下の青年諸君よ、靜に努力活動の素地を養ひ、徐ろに計劃をめぐらし準備を整へ、機會をねらつて、南洋に、南米に、滿州に、世界到る處に行いて雄飛せよ、活動せよ、努力せよ。そして大谷光瑞師は天下必ずしも一人ではないことを記憶するがいよ。

三四 百五拾人中の唯一の努力家

茨城縣鹿島郡鹿島町青年會長の報告によると、同町青年會神野支部會員た

る生井澤勝義君(二十三歳)は、隠れたる模範青年として天下に傳へるに足る人物である。

勝義君の父は行商を業として、暮らしは餘りにゆたかではないが、其不如意の生計をいふことが、勝義君の小さい頭に深くしみ込んだものが、君は尋常科に通ふ頃から、學校がひけた後は、家事手傳の一つとして、路に打やられた馬糞を拾ひ集めて肥料とすることを常とし、それをしまつてから復習をするのが習であつた。やがて高等科に入つてからは、君は薪を拾ふことを務として引受け、世の常の子供等とは全く異つてゐたので、早くから土地での賞めものであつた。

君は高等小學を卒業すると間もなく、鹿島町郵便局の集配人となつたが、其職務に忠實なことはまことに驚くべく、昨年二月悪性の感冒に犯された時三日を休んだのみで、未だ一日もして仕事を怠つたことなく、常に局の務を家事の

やうに心得て、精勤至らざるなく、品行は正しく、着實な上に質素を守つて、聊かも世の輕薄な氣風に染むことなく、それにいつまでも集配人を以て満足しようとするこゝなく、靜に胸中に計劃する所あり、既に大正四年四月自ら進んで青年支部會に入會し、日々の務めに体は甚だしく疲れるにも係らず、夜はいつも二時間位づゝは勉強しなければ寢ぬやうにし、また冬季の夜學會の如きもいつも續けて出席せぬことなく、大正七年度の夜學會まで、四回引續きて講習を受けたものは、百五十餘人の會員中、勝義君一人であつたといふに見ても、君が如何に努力心が強く、また根氣強いかゞ分るのである。かういふ風であるから、君は務の歸りが早いやうな時は、直ちに鍬や肥桶を肩にして農事の手助けをすることも怠らず、全く機械の如く、寸時もほんやりしては居れぬといふ有様にて、誰しもその勤勉には驚歎してゐるさうである。

努力家であり精力家である勝義君は、また非常に親思ひ弟思ひの愛すべき青

年である。試に其例をあけて見ると、大正五年四月のこゝである。君の弟武夫君は、丁度高等科の二年に進んだが、家計が裕でないからこいふ口實の下に、父母は武夫君を退學させて、或商店の子僧にしようとしたのである。けれども弟思ひの勝義君は、かくと知ると黙つては居なかつた。いろ／＼と思案した後に両親に向つて云つた。

「今日の時勢は、一通りの學問をしないものは、何の益にも立たぬのです。私はお蔭で高等科を卒業させて貰ひましたが、武夫が今年といふ所で退學させられるのは、可哀想でなりません。どうかもう僅かのことだから、是非卒業させてやつて下さい。その代り、これから後は、私は小遣を儉約して、授業料と學校の費用は屹度出してやりますから」

かういつて勝義君がこん／＼と願つたので、それではと、父母も遂に勝義君の望を入れて、次男武夫君をめたく卒業させたのであつた。

勝義君の父卯之助君も、義務心は甚だ強い人であるが、何しろ剛情な上に酒が強いので、酒を飲むと、よく人と口論をする悪い癖があつた。孝心の深い勝義君は、時々此様を見聞すると、堪らなく情けなくなるので、さうかして、父をして、此悪い癖をやめさせようとして努めた。或晩勝義君は、

「お父さん、あなたが好きな酒を、ふつつりやめて下さい。私は云ひませんが、あなたももう善い年になられたのだから、さうか他へ出てから酒を飲むことだけはやめて下さい、第一喧嘩口論なごしては見つともないばかりでなく、幾ら酒の上だからこいつても、人に對しても無禮である。それに萬一怪我でもされるやうなことがあつては、それこそ馬鹿けきつて居る。さうか私を助けると思つて、これからは、出先で酒をのむことだけはやめて下さい。その代り、日々晩酌の二合だけは、私が小遣を儉約しても、さうかして買つてあげますから、一生のお願いですから私の云ふ通りにして下さい」

といつて、涙をしほり聲をからして、誠心をこめて父をいさめた。勝義君のこの誠心は、さすがに天に通じて、それ以來、君の父は出先での酒をやめし、暴飲をも慎しむに至つたさうである。

勝義君は自分の職業上から、日中の青年會の會合や仕事なごには、已むを得ず出席することが出来ぬが、夜間の會合にはよく出席して、會の事業を助ける。自らも修養をつむことに怠りないさうである。そして感心なことには、君が畫の會に出席出来ぬ際は、父の卯之助君が勝義君の代理として出席し、或は道路の修繕だとか、田畑の試作なごの仕事に従ひ、又度々金を寄附して會員を奨励するなど、會員は皆君父子の態度に感歎して居り、勝義君の至誠至孝の精神から出た模範的努力の行動を、君の父の義に厚い精神は、次第に世に紹介されて、今では鹿島町の模範青年といへば、直ちに君の名を聯想するほごだといはれてゐるが、君の如きはまた、其青年時代を最も有意義に過しつゝあるものといふべきであらう。

三五 農事に熱心を良青年

茨城県鹿島郡諏訪村聯合青年會榎山支會長石崎聞一氏の報道によると、同村石崎要君(二十四歳)も模範青年として賞讃されて居る人である。

君は銚田農學校在學中は、寧ろ出来は善い方ではなかつたが、卒業後の君は政治家になる目的を以て非常に勉強を始めたのであつた。やがて君は中等教育を今一應やり直すために、嘗て土浦中學の受験を企てたのであつたが、それを知つた君の叔父さんは、家庭の事情から、君が新しい計劃を中止せんことを懇々と諭したのであつた。君は義理の爲と父母に對する情愛の爲に、思ひ切つて中學に入ることを諦めた、そして心機一轉の後には、君は農事に向つて全精神を注ぐこゝまなり、郡内にて模範桑園の開かれるや率先して之を經營し、或は麥

作の改良栽培や、或は害蟲豫防や驅除に、或は宅地の空地利用等について色々
と考案をめぐらし、現に自宅の生垣の如きは悉く梅を以てして花も實もある一
舉兩得の方法をとつてゐる。

君は其性至つて眞面目にて、無駄な費用を節約しては書籍を買ふことを此上
もない楽しみとし、野良仕事の行き歸りにも、常に懐ろから小形の修養書を出し
て讀むといふ風であつて、其他にも講義録をとつては、餘暇を利用して頭を養ふ
ことを怠らず、農を業とするのであるから、五月の如きは非常に忙しくて、疲
れることも甚しいに係らず、君は興が沸くと、十一時になつても十二時になつて
も平氣で讀書に耽り、斷乎として勉強をつゞけて居たのである。

さういふ風であるから、徴兵検査の際には、君は立派に中學卒業の學力ある
ものと認められ、やがてまた青年會長に選ばれたのであつた。青年會長になつてからの君は、一層土地の風儀をため直すに努め、俗歌を禁ずることを謀り

て自ら豊年節といふのをつくり、横井博士に訂正して貰つて、之が獎勵を謀つ
たりした。

君は先に徴兵検査に合格して、水戸歩兵第二聯隊に入營したが、入營中の成績
は實に衆にすぐれて、相當な家に育ちながら、入營中も節約をつゞけて給料を
貯金したりし、友情に厚く、親に對して孝心深く、其後十四師團の一員として
西伯利亞に出征したのであつたが、前途多望な模範青年だといはれて居るので
ある。

三六 血書で徴兵合格を願ふ

大正八年七月の帝國在郷軍人會松山支部發行「誠心」には、「司令官に血書の願
書」を題して、聞くだに痛快な一青年西谷常正君の近頃珍らしい行動が傳へら
れてゐる。

常正君は愛媛縣喜多郡大洲町の生れにて、家は代々大洲藩につかへて名望のある家柄であつた。君は昨年六月徴兵検査を受けると、其結果は第一乙種であつたので、試験場にて司令官に對して、甲種として徴兵に採用されんことを、再三願つたが、如何に君の美しい心掛に感動しつゝも、公けの試験をさうするここも出來ず、已むを得ず、司令官は其願を却下したのであつた。

じわじわも常正君は、まだ自分の熱誠が足らぬが爲に、司令官の心を動かすことが出來ぬものと一圖に思ひ込んで、悲歎の餘りに、歸宅の後、左右の腕八箇所を小刀にて切りつけ、溢れ出る鮮血をとつて、次のやうな血書を認め、さうかして特別の詮議を以て、合格させて貰ひたいと願ひ出たのであつた。

願書

原籍愛媛縣喜多郡大洲町九百七十五番地

西谷常正

明治三十二年九月二十一日生

私儀本日の壯丁検査に於て、不幸にも不合格致候多年の希望此處に挫折し斷腸の思ひを致し候何卒事情御配量の上合格者に採用被下度此段血書を以て歎願仕候也

吾々は常正君の無考な願書を笑つてはならぬ。吾々はそれよりも、君の奉公の念が燃えるやうなものであることを思はなければならぬ。動もすれば自身身の安全ばかりを考へ、國家に對する美しい犠牲の精神微塵もなくして、徴兵を忌み避けんとするものがある今日、常正君のやうな美しい心懸けをもつたものがあるときくと、國家の爲にこんな目出度いことなく、また以て不心得者をして愧死させるに足るであらうと思ふ。

また常正君の姉神野氏の妻は、常正君が検査に出る早朝、君が目出度合格するやうにと、神酒をあけて心計りの内祝までしたのであつたといふが、流石に

武士の血統を引いただけあつて、姉弟の美しい心懸けが何ともいへぬ心地がするるのである。

三七 夢の中にも懸命に稽古す

嘗て九州の或聯隊に、琉球生れの或る二等卒が居た。彼の教育の程度といへば、僅に自分の名を書けるといふばかりで、教範などはとても自由に讀む力はなかつた。殊に步調演習や銃の操法などいつては、非常に拙いもので、彼は劣等班の中でも最後まで残されて鍛はれたのであつた。それに夜課せられる學科ときは、一層彼の苦にする所で、彼は何事を尋ねられても、一つとして満足な答が出来ず、不動の姿勢をこつた儘で、よくいつまでも立ちつゞけたのであつた。さうした折の彼の眼には、いつも悲みの涙がぎら／＼と湛へて居るのだつた。

かうした悲みは次第に彼を奮發させた。彼は「さうかしてこれまでの恥をそまぎたい、そして誰れ彼にも劣らぬ成績をあけるやうになりたい」と思ふと、忽然として「いや、きつとなつて見せる／＼」と、密かに心に誓つた。そして彼は暇さへあれば銃を手にして稽古をつみ、入浴の往復にでも步調をミのへたりした。人々が夕方に酒保へ行つて、楽しさうに笑ひ興じて居る間にも、彼は熱心に鉄棒にぶらさがることを怠らなかつた。彼は人が笑つても罵つても何とも思はなかつた。只一心不亂に自分の技量を磨いた。狂人になつたのぢやないかと思はれるまでに夢中になつた。或夜のこゝである、彼は突然寢臺を脱け出して、銃をとるや否や、「膝撃の構へ」をやつた。そして物音に驚いた不寢番から叱りつけられて、初めて眼をさましたことがあつたさうである。彼は夢の中にも懸命だつたのである。

彼の努力は空しくなかつた。第二期の始には、彼は下士候補者の左翼にさへ

連つたのだつた。やがて彼の器械体操もめきくと進んで、上等兵時代の彼の
大車輪は、彼の得意な技の一つであつたのであつた。

三八 カアネギイは何故にゑらいか

私は可成いろいろの例をこり來つて、人間の努力の多くがどんな果を結ぶかを述べて來た。私は即ち最後に例を外國にとりて、偉人カアネギイミ、大發明家エヂソンが、如何にして今日の成功をするに至つたかを説いて見たい。

カアネギイミいへば、日本でも殆んど知らぬものなき世界の富豪の一人である。富豪なるが故に私は之を偉人ミいふのか。否々富豪必しも偉人でも何でもない。富豪にして最も哀むべき下劣なものや、笑ふべき惡むべきものが随分澤山ある中に、カアネギイ翁は殊の外に吾々の尊敬すべき偉大なる點を甚だ多くもつた人物である。敢て偉人カアネギイといふのは之が爲であつて、私が

彼の爲に其性行の一般を述べやうとするのも全くそれが爲である。けれども私は今此大富豪が如何なる點に於て偉人であるかを語るに先つて、少しく彼が經歷を述べて見なければならぬ。

カアネギイは其名をアンドリウと云つて、一八三七年十一月二十五日、蘇格蘭のダンファヌラインに生れ、其父は數名の職工を使つて機織をやつてゐる中流の紳士であつたが、アンドリウが十歳の春、蒸汽力の應用といふことが工場の上に革命を引起すこととなつて、カアネギイ家の手織工場は見る／＼衰滅に陥り、一時は可成な生活をしてゐた此一家も、忽ちにして貧窮になつてしまつたのである。まだ僅に十歳のアンドリウも、自分の一家が惨めな風に落ぶれたのを見るに、どうかして此苦みから父母を救ひあげたいと、彼は其時からもう小さい頭をなやましてゐたのである。

一八四八年、カアネギイ一家は最早蘇格蘭で生活が出来なくなつて、懐かし

い故郷の山河をあとに、大西洋を横断して米大陸に渡り、ペンシルウエニア州のアレガニー市に到着した。此地にて父カアネギイが木綿工場の一職工となつたのを見ると、アンドリウはまだ十二歳ながら、自ら父に請うて父の工場の糸繰小僧にやまはれ、一週一弗二十仙の給料を貰ふこととなつた。彼は即ち嬉しくてたまらず、第一週の後には得た給料を手にして、甚しく誇を感じ、既に自ら太人になつたやうな心持を懐いて、愈自分を自重したさうである。

彼は其後一年程たつて、親戚の勸によつて、紡績工場の汽釜火夫となり、更に甚しい勞苦をなめたが、まだ嘗て其苦を人に語るこゝもなく、
『こんなことで挫折する程なら、寧ろ死んだ方がましだ』

こは當時彼が口癖に云ふ所であつた。

一年餘り火夫をやつてゐる間に、彼は父の心配で、ピツツバアグのオハイオ電信會社の電報配達夫となつた。此時彼は丁度十四歳で、一週二弗五十仙の給

料を貰ふこととなつたが、其時の彼の得意は何も云へない程で、自分ほゞ幸福なものなると世界にないと思ひ、會社を逐逐はれてはこの心配から、之を防禦する一策として、主なる街の商家を右側から左側迄、順々に片ばしから暗誦し、遂に全市内の商店の所在と名とを、悉く知るに至つたさうである。

十四歳の少年カアネギイが、斯の如き勉強と熱心の態度に出たのは、當時彼は、さうかして此會社の電信技手たらんことを望んでゐたからで、彼は即ち一方に於て、電信技手等の出勤前に、熱心に通信事務の練習を始め、間もなく其技術が非常に熟達し、折々技手の不在の折などには、自ら技手の代理をつとめて、技手や其上役の人々を驚かし、遂に望の如く技手に採用されて、月俸二十五弗を受けるこゝとなつた。彼はこれぞ立派な財産だと云つて狂喜し、やうやう父母の生計を助けることが出来るやうになつたこゝを樂しんだのである。カアネギイは此時十六歳の少年であつた。

暫くして彼はペンシルウエニア鐵道會社に雇はれることとなり、同社の電信技師をかねて、一躍して三十五弗の俸給を貰ふこととなつた。此會社に居る間、彼は監督者スコット氏の信頼を得ること甚しく、遂に氏にすゝめられて叔父に五百弗を借り、或る有望なる會社の株券十枚を手に入れることとなり、第一回の配當金五弗を懐にするや、嬉しくして其配當手形を友人の間に持ち歩いて見せたさうである。これ彼が商業界に足を入れた第一歩であつて、常に貨殖の路に心懸けることを忘れなかつたのは、彼が早くから其胸中に一大理想を懐いてゐたが爲である。

一八六一年南北戦争が起ると同時に、恩人スコットが陸軍次官となるや、カネギイ又軍に従つて、鐵道及び電線守備の任に方つたが、やがて負傷するや彼は歸休を命ぜられて、再び例の鐵道會社に入り、嘗て寢臺客車の發明者相知り、其有望なるを見て、勤勉家としての信用によりて、一銀行より可成に多

額の金を借りて、此客車の製造事業に出資し、次第に利益を收め得ると同時に又石油事業に出資して、更に巨額の収益を得るに至つた。やがて彼は二十九歳にして、勤続十三年の後ペンシルウエニア鐵道會社の副社長にあげられ、ついで製鐵工業の前途有望なるを認め、同志を集めて、イストン鐵橋工場を創立し、爾來各地より引き切らざる注文に多大の利益を占め、愈立脚地を得、之より忠勤なる雇人の境遇を去つて獨立の人たらし、即ち鐵道會社を辭して、専ら製鐵事業に身を委ねることとなつたのである。時に彼はまだ僅に三十歳を超えたばかりであつた。

此時に至りて、彼の名聲は天下に普く、彼の關係した事業にして隆盛ならざるものなしとさへ傳へられ、何人も争ふて彼の爲に資本を投するのであつた。彼は即ち第一着として一鐵工場を買収して、更に一鋼軌工場を合し、やがて英國を漫遊して、鐵道の鐵軌が鋼軌に代へられんとするを見るや、愈鋼鐵製造を

專業とするに決心し、三十九歳の時、弟トマスや其他の人々を合せて、益々其業をはげみ、年一年と其事業を擴張し、一八八八年には、ピッツバアグ附近五哩の間は、カアネギー工場を以て充さるゝに至つた。此當時ですら彼が事業の如何ばかり隆盛であつたかは、一ヶ月間の

製産鉄鐵額	十四萬噸	職	工	一萬五千人
鋼 鐵 額	十六萬噸	鑛山及運輸業工夫		一萬二千人
私用機關車	十四輛	職工給料の月額		百二十五萬弗

であつたといふに見ても、其大勢を知るここが出来てあらう。やがて一八九二年、彼が五十六歳の時には、カアネギー鋼鐵會社の總資本金は二千五百萬弗となり、ついで六千萬弗となり、一九〇〇年には一億二千五百萬弗に増加されるに至つた。そして其前年の此會社の總純益金は、二千萬弗に及んでゐたといふが、一週間に僅に一弗二十仙の給料を受けて、威張つてゐた一

個の糸捲小僧は、五十二年の後には、世界の鋼鐵大王と呼ばれ、其懷中を潜つた金銀は、幾百億弗なるを知らないといふに至つたのである。

斯の如くして一代の間に、其勵精と勤勉と、機智と正直と熱心と努力とによりて、何億といふ富を作り得たる富豪カアネギーは、千九百年以後は何をなしつゝあつたか。これからが即ち私が眞に此偉人について語らうとする處のものである。

一九〇一年の春、米國の一富豪ピアポント・モルガンは、五億八千五百萬弗の大資本を有する此カアネギー鋼鐵會社の外、七大鋼鐵會社を聯合して、米國に於ける一大鋼鐵トラストを形成することに努力した。かくして結合されたる資本金の總額は實に十一億四千五百萬弗の多額に上つたのである。

此一大トラストの成立するや、カアネギーは即ち事業界を隱退して、其城を全く後進有爲の人にあけ渡し、單に年に一千五百萬弗の配當を受けることとな

つた。これ丈けならば何でもないことである。只勤勉と努力によりて、大資産をつくつて、程よい頃に隠退した。これ丈けのことならば、まるで書くにも足らない下らないことである。そんなことで偉人といはれるならば、日本にでも偉人は非常に澤山に在る。けれどもカーネギーは、只金を儲けて、その金を一個の私有財産として、徒らに榮華を誇り傲奢を極めやうとするやうな、劣等なる富豪ではない、彼は云つてゐる。

「富んで死ぬるのは耻である、巨萬の富を子孫に譲るのは、大丈夫の恥辱である」

と。彼は即ち其少時より斯の如き一大理想を有し、之を實行せんとして莫大の富を作つたのである。事業界から全く隠退した此カーネギーは、即ち如何にせば此莫大なる富を最もよく散ることが出来るか、最も有益に使用することが出来るか、之を實行せんとして、即ち天下に向つて普く回答を求めたのである。

彼も亦實に一個の快男兒ではないか。

三九 よく金を用ふることを知る

巨萬の富を如何によく使用すべきかを知らんとして、之を滿天下の投票に關ひ、數百萬通の答案を得たカーネギーは、之を参照して思案と熟慮の後に、木體に於て一個の概案を得るに至つた。此概案なるものによりて見ると、文明の進歩と平和とを熱愛せる彼は、先づ其富の大部分をば、人類の進歩に於て最も大切なものである教育事業、就中大學及び天文臺の爲に費さんとしたのであつて、自由圖書館及び美術館、博物館などの設立費や、衛生事業費として病院、醫學校、研究所及び看護婦養成所等の設立費及び公園、公會堂、公共浴場、教育費等は、此につぐものであつた。かくて彼が最近數年間にピッツバーグ市のカーネギー圖書館や、紐育圖書館の外、米國各地の圖書館建築及び蘇格蘭の諸

大學や、其他の種々の公共事業の爲に費した金額は、實に二億圓に近いのであるが、此外にカーネギーが最も意を用ひつゝある大事業は、所謂カーネギー研究所と英雄資金との二つである。

カーネギー研究所はピッツバアグ市に設けられた科學研究所にて、最初の目的は、有名なる大學教授又は有益なる研究を遂げた學者に補助金を與へて、益其研究を完成せしめんとし、又優秀なる青年科學者に、年々一千弗宛の補助を與へて研究に従はしめるさいふのであつたが、此目的は次第に擴張されて、今日では米國の各地に諸種の研究所が起され、カリフォルニアのウイルソン山の如きには、大陽物理研究所が設けられ、世界最大の望遠鏡が据附けられつゝあり、近く之が完成を見んとしつゝあるのである。かくてしてカーネギー研究所は、今や米國の所有さいふやうな小さいものではなく、世界的の大研究所となり、専ら學問進歩の爲に經營されつゝあるのである。

それから又英雄資金といふのは、所謂戰爭の英雄を鼓舞獎勵せん目的を以て設けられたものではなく、他人の生命を救はんが爲に、自から死を決して危険を冒したものが、若しくは他人の利益の爲に、自分の利益を犠牲にしたものを以て、所謂英雄として、其善行を旌表せんが爲に、カーネギーによりて思附かれたものであつて、五千萬圓の資金を以て、一九〇四年の春から實行せられてゐるのである。

かうして、彼は平和を愛するが爲に、戰場の勇士を尊ぶと同じく、平和の英雄を重んじたのであるが、所謂貧民救助や慈善事業の如きは、徒らに多數の乞食を製造するに過ぎないので、此等については彼は多く意を用ふる事なく、寧ろ眞面目に自ら助くるものを助くる事を努めて下の如く云つてゐる。

「富めるものよ、死ぬるに先つて、其富を賣つて、貧しきものゝ爲に、最も有力に之を用ひるがよい。かうして彼は無用の貯蓄者として終る恥辱を免れるこ

さか出来、死に臨んで、貧しからうとも、而もその同朋から受ける敬愛と感謝
 ご賞讃とは、どれ丈けか喜ばしいものであらう。汝の心はかうして、汝が生れ
 て、此世に善美とが加へられたこゝを嘯き、天國の門は、かうして富者の爲
 に開かれるであらう」と、それから又かういふ話もある。

或日の午后、カアネギイが、紐育ウォール街の株式市場を、何事か思案す
 るやうな様にて歩いてゐたことがあつた。と株屋の一番頭は、直ちに彼の腕を
 捕へて曰つた。

「紳士、今正に好機の絶頂にあるのです、そんなに儲がないで、一つ試みて御
 覧になつたら如何です、屹度勝てるにきまつてゐます」
 紳士は之に答へて何といつたか

「ありがたう、もう私には金は澤山だ。逆も最う使ひ切れなくて困つてゐる。
 私は本當にさうして金を使はうかと思つて苦しんでゐるのだ」

番頭は始めて此紳士が、カアネギイなることを知つて、吃驚して其無禮を謝
 したさうである。

此等の彼の言を見ても、カアネギイ翁が、其富を得るよりも、如何によく之
 を散すべきかについて、眞面目にどれ丈け苦心しつゝあるかが分ると同時に、
 理想的富豪としての、彼の面目が躍如たるものが其處に窺はれるのである。

彼は決して單に富を積むこゝのみを知つて、之を善用することを知らざる愚
 なる富豪でもなければ、單なる憐むべき金錢の奴隷でもなかつた。彼は實に、
 巧に之を善用せんが爲に、金錢を積む所の奮闘家であり、又最もよく之を善用
 することを知つてゐる賢明なる人であつたのである。私が今世界的の大富豪カ
 アネギイを以て、偉人の一人として尊敬せんとするのは、實に此一点があつた
 が爲なのである。

彼はまた世間一般の富豪と其選を異にして、少年時代から殆んど教育を受け

たことなきに係らず、小僧時代より常に讀書を好み、政治經濟の書籍は勿論、哲學や文學等も、古今の傑作は大抵之を讀破し、シエクスピヤの戯曲の如きは、愛讀書の一であつたさうである。彼は又文章を能くし、既に其著書六七卷に及び『富の福音』及『實業帝國』の二著の如きは、嘗て洛陽の紙價を高からしめたものである。

彼れ今や退隱して蘇格蘭のスキボにあり、靜に餘生を樂みつゝあるのであるが、尙其門外には電信局を設けて、世界の移りゆく形勢の注目に怠らず、時には出でて到る處に演説をなし、或は山野に遊獵を試み、鑼鑼として壯者の如く、事業界を退きて、猶每秒一圓餘の所得は彼が懐に集りつゝあるさうである。

四〇 現代の大發明家エヂソン

現時の我國に於ても、殆んど都會名名のつく程の都會であるならば、大抵今では其處に電燈の設備のないものはない。

電氣燈！我々は今でこそ、此驚くべき燈火の力をそれほぎにも思はないで、單に『便利なものだ』とか、『なに電燈がなければ、又それでも我慢する』と、いふやうなことを云ひがちであるが、若し今の世界から、電燈といふものが、一時的でなくて、忽然として永久的に、取り去られてしまつたとしたらどうであらう。吾々は實にどれ丈か不便を感じるころであらう。

電燈！我々は此驚くべき燈火の力によりて、暗黒の世界を晝に化することが出来た。その名にそむかない暗燈の下に、手のやうな大きな文字を讀んでゐればよかつた時代は、此電燈の發明によりて直ちに驅逐せられて、如何なる小さい文字も之を讀むことが出来、如何なる微細な仕事も之を爲すことが出来るやうになつた。此不可思議なる燈火の發明によりて、吾々の世界は驚くべき變

化をした。色が變つた。輝きが變つた。闇が光になつた。之と同時に吾々の眼の世界も頭の世界も變化した。物の見方も考へ方も變つた。吾々は薄暗い、心持の悪い世界から、光輝燦然たる氣持のいい世界に移るこゝが出来た。吾々人間の生活の上に、電燈がもたらした驚くべき變化は、實にたごへるに物もない位である。

ところが此不可思議なる驚くべき電燈の發明者は抑何人であらうか、云ふまでもなくそれこそ、私が今此處に述べようとしてゐる現時世界第一の發明家であり、又電氣學者であると云はれてゐる米人トマス・エヂソン氏である。此大發明家によりて、吾々が供給されてゐる種々の有益なる發明の數は、既に幾百種かにのほり、其中重なるものとして發電機、電動機、蓄電池、磁電抵抗測定器、電氣印字機、電送寫真法、印刷電信法、電氣死刑機、音調電信法、分鏡器、セメント製法、混凝土建築、電流計機、鎖孔器、真空ポンプ、果實貯藏法

の外、最近に於ける種々の發明が數へられてゐるのであるが、其最も吾々の生活の基調の上に、直接に大影響を與へたものはいへば、いふまでもなく、それは電燈の外には、蓄音機、電話機（此發明者は他にもある）、活動寫真、有聲活動寫真、各種の電信法等が主なるものである。極めて安價なる見料を拂つて、吾々が世界の有ゆる大事件や、風俗や、習慣や、自然の風光や、芝居や、戦争や、色んなものを、居ながらにして、而も殆んど直ちに見ることが出来るに至つたのも、エヂソン氏の力である。如何なる大音樂家の立派な演奏や唱歌も、之を後の時代に傳へたり、海のあなたからこなたへと、取りかへたりすること出来るに至つたのも、エヂソン氏のお蔭である。其他氏は一本の電線によりて、同時に四つの通信を、相方から送つたり受けたりする電信の送受法や、所謂エヂソン電話機をも發明して、吾々の生活の上に非常なる便宜と驚異とを傳へた。思ふに氏の驚くべき創造力がもたらした發明に接して、何人かよく何の

影響も興味も受けないものがあるだらうか。氏は實に現代に於ける最大巨人である。

四一 永久に忘れられぬ大發明家

世界の有ゆる人間に對して、悉く何等かの影響と興味とを與へるに同時に、人類の向上進歩に於て、一大勢力であつたといふ意味から見ても、私に現代の最大巨人の一人であると思つてゐるエヂソン氏は米國人である。

氏は一八四七年二月を以て、米國オハイオ州のミラン村に生れた。元來和蘭人であつた氏の曾祖父は、一七三〇年米國に移住し、銀行家として名の知れた人であつたが、氏が七歳の時から、家運が振はなくなつて、エヂソンは自ら勞働によつて食はなければならなくなり、十一歳の時には、自ら進んで列車内の賣子になつたのであつた。之より先きエヂソンは、父母と共にミシガン州のユ

ウロンに移住し、其處で小學校に入つたが、腕白なる氏は成績至つて不良で、教師は末の見込がない鈍兒として退學を勧めたのである。生來負け嫌ひな活潑な美しい人で、結婚前に小學校教師をしてゐたエヂソンの母は、即ち自分の膝下で、氏を教育することとなり、爾來氏は嫌であつた數學にも興味をもつやうになり、九歳の時には既に、有名なヒウムの英國史や、ギボンの羅馬史などを讀んださうである。

ブランド・ツランク鐵道に乗込んで、新聞賣子として働いてゐたエヂソンはやがて、列車内の一室に、印字機や活字やローラー及色々の電氣装置を並べて其處で自ら週刊新聞を發行し、よく怪腕を揮つて、毎月平均九十圓宛の収益を得たのであつたが、或時其棚にあけてゐた燐素の壘が碎けて火事を出さんとしてから、氏は不幸にして片耳を失ひ、之と同時に、此列車を逐はれたのであつた。けれども暫くするとエヂソンは列車に轢かれんとした一兒を救つたお禮と

して、其子の父によりて電信技術を教へられ、業を終るに、ユーロン停車場の電信技手に採用され、五十圓の俸給を受けることとなつたが、其當時なかくにずるかつたエヂソンは、自分では快く居眠りをしながら、一見眠らずして仕事をして居るやうに見える方法を發見し、音の烈しい眼覺し時計を買つて来て、列車が通過する五分前に鳴るやうに仕かけて、その間巧に睡眠をむさほつてゐたが、之が爲に氏は其職を免ぜられたのであつた。

けれども氏は決して其本性に於て、質の悪い怠惰放逸なものではなく、其後數年間各地の停車場に奉職した間の如き、斷乎としてだらしない友人等の誘惑をさけつゝ熱心に讀書にふけり、金さへあれば直ちに之を書籍に代へるといふ風であつたので、友人等も亦清廉堅實の人として氏を尊敬し、貯蓄すれば必ずエヂソンに委託するといふ風であつた。

やがて數年の後、エヂソンがポストンに移つて、ウエスタアン・ユニオン會

社の通信技手となるや、直ちに一個の通信速記法を發明し、此處に氏の發明家としての生活が開かれ始めたのである。

ポストンに居ること數年、其間數多の發明を行つたエヂソンは、二十一歳の時紐育に行つて、久しくもてあまされた一會社の或機械を裝置して天才を發揮し、直に月俸六百圓をもつて此會社に傭はれ、其處に多少の時間と金との餘裕を見出すや、氏は直に小工場を設けて改良印刷機を發明し、其報酬として八萬圓を得たのであつた。此時に至りてエヂソンの聲名は米大陸に普く、其他各種の電信送受法を發明し、ついでエヂソン式の電話機を完成し、やがて一八九九年十月電燈を發明するに至つて、人間といふものが此世にある限り、エヂソンの名は遂に永久に忘れられることのないものとなつたのである。素よりエヂソンが電燈を發明するに先つて、例の孤光燈は既に發明されてゐたが、これは大なるに過ぎて到底家庭の用となすに不充分であつた。エヂソンは即ち燭光のこ

れより小なると同時に、燈心に用ひて、強力の電氣に熔けない物質を發明し、之によつて一個の白熱燈を製造せんとし、種々な苦心と實驗の後に、遂に偶然にも日本製の扇子の骨の竹を炭にしたものが、最も好都合であることを發見したのである。エヂソンは此時丁度四晝夜の間試験室にかゝんだ儘で、發明の完成するまでは死んでも眠らないと云つたさうだが、氏の此恐るべき大決心は、吾々の生活の上に一大革命を齎らすに至つたのである。暗夜に太陽を捕へ來ることに成功したエヂソンは、之について更に蓄音機と活動寫真とを創造し、吾々の生活に對して、聽覺の方面と視覺の方面に、更に新なる平野を開拓して呉れたのである。吾々はエヂソンが發明をする度に、新なる不思議の世界に導びかれるのである。けれども此不可思議は、エヂソンにありては何等の不思議でもなく驚異でもなかつた。氏に在つては努力は即ち發明であり、文明の進歩であり、人類の幸福であつて、實にやエヂソンは一大創造者である。大發明家

である。今の世の偉人中の偉人である。巨人中の一人である。米國は實に此大創造者、大發明家を産出したことによりて、其他の凡ての缺點を補ふことが出来るのである。

四二 大發明家の努力と性格

斯の如き色々の大發明を成功するに至つたエヂソンの頭腦は、素より非凡なものであるに相違ないが、氏をしてよく其天分を發揮せしめたるものは、氏の驚くべき精力と努力とに之を歸さなければならぬ。氏は毎朝八時頃に實驗室に入ると、午後六時茶を喫するが爲に歸宅する丈で、就床時の十一時までは絶えず研究に従事して、氏の一日の睡眠時間は、大抵四五時間しかないのである。氏嘗て曰く、

「自分は十五年間毎日平均二十時間づゝ業務を執り、難問題に接すると、六十

時間も繼續して、それが解決してから始めて床にはいり、覺めると又前の勞を忘れて、快く新なる業に従ふのだ」と、又曰ふ「嘗てフアラデイの電氣實驗書を購ふた時は、毎朝三時から起きて、同室者の朝食を喫するまで耽讀した。讀書の樂は、飯を食ふに優ること數等である。人生は短く、成したい事は多い、之を思ふと一日も安逸に過すことは出来ない」と。

氏は斯の如く、絶えず其心を熱心なる研究にのみさゝけてゐたのであるから、其研究中には、自分に對して助を與へるものゝ外は、決して何人にも接するこゝもなく、然も閑ありて人に接するや、至つて快活質朴にして、純良の態度と、圓滿にして愛嬌深き相貌は、宛がら小兒の如き觀があるのである。氏が事務上の助力者ジョンソン氏は嘗て氏を評して云ふ

「エヤソン氏は一個の快男子にして、其淡泊なる事宛然童兒の如くである」と。氏はまた自分の使用する職工などに對して少しも傲慢の態度に出づることな

く、絶えず彼等と膝を交へて食を共にし、破れ帽子に弊れ着物で、實に殆んゞ職工とかはりなく、嘗て新來の一職工の爲に、實驗所に入ることを拒まれたことさへあるを見ても、氏が如何に奢侈華麗を惡んで、尋常一様の富豪や所謂ゑらい人との選を異にするかゞ分るであらう。

氏はまた慈悲の念深く、職工や助手等は之が爲に、氏を以て眞に神の如く崇敬してゐるのである。

オレンジに於ける氏の實驗所内にて、注目すべきものは文庫であるが、それは百呎四方、高さ四十呎の大廣間に、其一面に二重の棚を設けて、それに書籍や鑛石類を陳列し、英佛獨伊國語に亘れる藏書の數は、實に六萬卷に及んでゐる。

エヂソンはこれまで色々の豫言をなして、世人を驚かしたのであるが、その豫言の多くは、遠からずして、いつも實現さるゝ所に、氏の偉大さがあるので

ある。今より十年前、氏が五十九歳の誕生を祝つた時に於て、氏は今後十年間に科學が著しく進歩し、空氣中から窒素を分離して、之を肥料とするに至るだらうといつたが、爾來此成績は非常に進歩して、既に戰爭中獨逸では硝石を外國より輸入することが不可能なところから、空氣中の窒素をとつて硝石を製造し、火薬をつくつて居たさうである。空氣中から肥料を取る事が盛に行はるゝに至るのは、最も近き將來のことであらう。

エヂソンはまた三百年後の世界が、どんなものになるだらうかを想像して、次のやうに云つてゐる。

三百年の後には、吾々が多年の望であつた火星との交通も、ヘリウムと稱する金屬の塊から出來た飛行機によつて、容易に行はれるのである。ヘリウム飛行機の最大速度は一秒時間に十萬哩といふ驚くべきもので、此飛行機にて地球に近い、空氣のある空中を走るには、摩擦力が多から五時間かゝるが、一旦空

氣のない空間に出ると、其處には摩擦力がなから、一秒間に本當に十萬哩を飛ぶことが出来るのである。

やがて火星の附近に行くと、ヘリウム飛行機は、更に火星の大氣中を通るに三時間を要するから、前の地球の附近を通るに要する五時間と、この三時間との合計即ち八時間の外に、全く空氣のない空間四千八百萬哩を飛ぶに要する時間が八分であるから、結局八時間と八分にて、やがては火星と地球との間を旅行し、十六時間と十六分間で、二つの間を往復することが出来るに至るのである。

それから又今後三百年後の、二十三世紀には、鐵道列車は決して停止することなく、乗客は彈丸の作用で汽車に乗り、自轉車は電氣仕掛で特別道路を走り、郵便物は自働郵便云つて、空中を飛ぶ小さい函によりて運ばれ、其函は磁石の仕掛で郵便局に吸ひつけられるのである。其頃の人間の食物は、主として植物質にて、あつさりした滋養分の多いもので、農業が盛んになつて、梨や

林檎は大抵直徑一呎位になる。それから人間は酒が嫌になつて、大罪人に對してだけ、一週間位打つつけて酒を飲ませるやうになり、人民は多く市外に住み、市内に住むものは、却つて下級の労働者であつて、その頃の土地は、電氣の作用によつて、充分に炭素を供給して、耕作が盛に行はれるに至るのである。

エヂソンは今猶ほ無数の研究をなし、着々として之に成功しつゝあり、最近に於ても、敵の潜航艇を勝手に左右し得る發明を成就したる傳へられてゐるのである。

之を要するに、エヂソン氏の今日は、全く其努力と勢力がつくりあけたのであつて、氏は今も毎日僅に四時間以上を眠ることなく、水まで合して三十五匁宛の食物を一日三回づゝ食するのみにて、世人の精力の足らないのは、要するに過食と過飲と過眠の結果だと氏は云つてゐる。

其昔、鈍兒として小學校を逐はれ、睡眠好きの一電信技手であつたエヂソンが、驚歎すべき今日の大成功を得るに至つたことを思ふと、聊か不思議の念にたえないのであるが、而もそれが大なる努力と精力の賜であることを思ふ時に、吾々は其處に面白き一大暗示を發見しないではゐられないのである。

四三 成功と失敗の原因

かういふ風に見て來ると、吾々の一生に於て、最も大切なことは、いふまでもなく努力といふことである。努力は即ち人をゑらしくし、人をしていつかは必ず成功させるのである。努力なくして眞の成功なく、成功の根源は努力の外にないのである。けれども凡ての成功は必ずしも努力ばかりで得られるものではない。そこにはいろいろなものが必要ならぬ。即ち私は今此處にペンををくの方に、更にドースン氏が、如何にすれば成功が得られるかといふことをか

た論文の二節をかりて来て、これまで私の述べ来たことが決して誤つて居らぬことを証據だてるに同時に、成功に必要な努力以外の要素がどんなものであるかを附加へ、更にまた所謂成功を求めに方りても、成功することのみを眼目とするに、大なる謬に陥るものであることを誠めて置きたいと思ふ。ドースン氏はいふ――。

若し夫れ世の中に、何人も得たいと思ふものがあるとするれば、それは蓋し『成功』であらう。素より成功といつた所で、それは何人にも同一のものではなくて、人々によりて其意味は異つてゐることであらう。けれども何人も其企圖し、計畫する所のものを成就することを欲しないものはなからう。要するに、吾々は皆勢力を得、名譽を擔ひ稱讚を博せんことを欲するものである。人ごしでは之れ誠に至當のことであつて、胸中苟くも抱負の閃きを有するものゝ等しく希望する所である。

入若し其望む所を成就せんとせば、必ず百難を排して之に向はなければならぬ。云ひかへれば決心と忍耐と努力と不撓不屈を以て之に當り、加ふるに事を處するに、極めて賢明でなければならぬ。そして能く斯の如くなれば、其成功は蓋し疑ないことであらう。

「物悉く待つ人に到らん」といふ諺がある。遊惰徒らに之を待つのでなくして、勤勉に至らざるなく、堅忍持久、靜に其成るを待つに於ては、恐らく世に得られないものはなからう。

素より偶然の出來事が起つて、人をして全然失敗に歸せしむるやうなこともあらう。練習到らざるなく、人も自分も勝利は疑ないと期待した漕手と雖も、決勝点近くに於て、偶オールが破損したが爲に、全然競漕に失敗するが如きこともあらう。十哩や二十哩を、善く乗り善く走つて、少しの疲勞も感じない自轉車乗も、決勝点に達せんとして、最後の一踏に脚を迂らすいふ不幸を免れ

ないこともあらう。極めて準備の整頓した學生も、偶頭痛の爲に失敗して、褒賞を貰ふ榮譽を失ふこともあらう。斯の如く急病や、偶然の椿事や、死や、此等のものが、奮勵し努力した人々の手の中から、成功の花を奪い去ることは、往々にしてあるであらう。けれど此等の椿事を外にしては、適當な努力が其成功を得べきものであることは、決して疑ひの餘地がなからう。

試に世の大失敗の原因を尋ね見よ。彼は奮勵努力至らぬことなかつたやうに見えても、猶ほ一大過失や不注意が、一般に此處に到らしめたのであることが發見されよう。「不可能」の文字を笑つた彼の大奈翁も、數多の過失が、彼をして、モスコより退却するの己を得ざるに至らしめた後は、自らの身に落ち來る不幸を防止めて、其處に一大曲藝を演ずることが出来なかつたではないか。

青年もまた此過失を免るゝこと能はざるものがあらう。彼等は不可能の職業

を追うて、而も其成功を求めるやうな場合があらう。其才能が實際頭にあるにあらずして手にあり、學者たらんよりも技師として、否寧ろ技術家として適してゐるのも顧みずして、却つて學者として名を顯はさうと望むやうなこともあらう。或は學生としては讀むべからざる悪書を読み、商人としては用ふべからざる不良の方法を探つたが爲に、折角の計劃を全く畫餅に歸せしめ、識らず知らず、始から失敗するに決まつた選路を辿ることもあらう。けれど此際、立派な忠告を與へるに足る才識ある人の言に耳を寄せ、相應なる職業を追うて努力することを誤らざれば、他日其望む所を得て必ず遂に成功するに至らだらう。是に於てか一個の問題がある。全然快樂を忘れて、勞働の生活を營み、専ら成功の人とならうと決心するか、若しくは放恣にして、自ら好む所に従ひ、成功が求める勞働に其身を委ねることが出来ないか、之れが即ち諸君が豫め取捨しなければならぬ先決問題である。不幸にして前者を捨て、後者を撰ばうとす

るものは、此から先を最早讀む必要はないのである。何となれば私は今其心中に稍價値ある抱負をもつて、之れが爲には自分を犠牲にする準備ある人に對して、以下の言を費したくないからである。

四四 成功を求むるに誤解してはならぬ

ドースン氏は更に進んで、眞に成功を求むるものが誤解してならぬことを誠めて下の如く云つて居る――。

私は此種の敏活にして才能ある人々に告げて云ひたい。『進め、進んで繁榮の路を求めよ』。そして、も一つ、私は附言して置きたいことがある、他でもない、『人生の褒美を以て成功だと考へるやうな誤解をしてはいけない』。『一言が之れである。』

人生の褒美は成功であるとは、實に一般世人の考へる所で、世間は殆んど此觀

念を源として活動してゐる。けれど明敏にして機智に富んだ青年は、此念に迷はされるやうなものがあつてはならない。彼は一般世人と同じ立場に立つて、事物を判断するやうな愚を避けなければならない。蓋し世人の立場なるものは、概ね極めて不正なものであつて、屢あさましくも不公平なものであるからである。世人は思つてゐる『成功以上に成功はない』と。そして人もし成功したとすると、世には彼が如何にして成功したかを追究して、其成功の手段を尋ねるといふやうな面倒を敢てするものはないのである。

或種の行爲に對しては、世人は又曰ふ。『成功を得るに至る行爲の是非曲直を判断するものは成功以外にはない』と。之れ實に、不正の行爲も、所謂成功に到達すれば、其行爲は不正ではなくして善である。之に反して、善行も失敗に終らば、其行爲を不正なりとするものでなくて何であらう。結果のみを見て、其行爲を判定する標準としようとするものでなくて何であらう。世人の所謂立

場といひ標準といふものは、概ね斯の如きものである。誠に不正不公平なるものではあるまいか。だから人若し粗放狂暴の行を敢てして失敗したとするに、世は彼を責むるに足るべき辭のないに窮するであらう。けれども彼が若し幸にして所謂成功の光明に浴することを得たとすると、世は彼を稱讚し嘆美し、彼の頭に加ふるに名譽の月桂冠を以てするであらう。之をかの投機事業に見るも明白なことで、彼が失敗すると、世は彼を呼んで愚人だ狂人だと罵るが、彼が幸にして大儲をして、一舉に巨萬の富を得たとするに、世は皆彼に詔らひ、呈するに賀辭を以てし、甚しきに至つては、其辭を低くして彼の足下に走り、命に従ひ用を便じて懸命である。誠に奇なることではなからうか。

宏量の青年が始めて社會に入り、其一部に於ける此の不公平を見るに方りては、思ふに心中堪らないことがあらう。彼は今日まで極めて平穩に社會の風波に遭難することなく、専ら純潔な教育を受けて來たのだ。彼は思ふ「正義は到

る所に正義である」と。そして彼は其全力を盡して苦心經營し來つた事業が、不幸にして失敗を招くことがあつた際に、社會の攻撃を受け、罵詈雑言を蒙らなければならぬ故を解することか出来ないのである。而も彼の行爲が、悉く世に露されたとするに、彼は其怠慢と不正との爲に、大なる責罰を受くべきに方りて、偶僥倖によつて成功を得たとすると、彼は直ちに偉大なる名譽と尊敬とを受くるに至るのである。是れ青年に對しては最惡の時でなくて何であらう。吾々は皆其最初に於ては、斯うした不正の爲に戰慄した。けれどもそれは極めて瞬時の戰慄であつた。吾々の多くは之れに慣れた。吾々の心情は今や氷つて石のやうになつた。そして遂に世人と同じやうな目を以て事物を見、徒らに成功を尊重するに至つたのである。

見よ、徒らに成功の爲に成功を尊重して、敢て其手段を問はず、「偶然の成功」と自然の結果から來る成功と、何で其善惡に撰ぶ所があらう、成功は吾々の要

むる所だ、成功は萬事を決する。之に及ぶものが何處にあるだらう』とは、一般世人の所謂成功に對する觀念である。そして之れ動もすれば、青年の陥らうとする極悪な誤謬の一つである、實に人生の全潮流を毒するものである。青年は須らく謹んで人生の一大問題を、絶えず其眼前に認めて居なければ、此恐るべき誤解に陥るこゝが免れ難いのである。然らば其人生の一大問題とは何であらう。他ではない、『自己の精神を没却して全世界の味方を得たまで、それ抑何の功であらう。何の能であらう』といふ事である。

然らば自己の精神を没却するとは何事をいふかといふに、要するに自分に對して價值なき生活を營むことをいふのであつて、吾々が若し價值なき行爲を以て精神の榮譽を汚したとするに、吾々は自分の精神に對して罪を犯したのである。加ふるに吾々の賤しい規律なき行爲が、却つて成功を得て、吾々の眼が其成功に眩惑され、吾々が自分の欠點をそれによりて忘れるやうなことがあつ

たとすると、それは吾々に對しては無上の大破滅なのである。

四五 成功の意義と之を得べき要素

かうしてドースン氏は、根本の精神を没却した成功は、眞の成功でないことを説いて、眞の成功とはどんなものであり、それは如何にし得らるべきかについて下の如く述べてゐる――。

さはあれ、成功は正直な努力者のみに來らんことは疑ないのであつて、吾々は只下に擧ぐる所を記憶すれば足らう。

(一) 成功とは、富貴と名譽、權力を得ること、常に同一の意義ではない。財と名と力を得ることを成功と思ふと大なる間違である。

(二) 其事業の成功の見込あるに否とに係らず、一生を至善の事業に委ねるものが、最も成功する人々である。蓋し善事業は永久に消失することがない

からだ。而も之れ世人の一般に考へない所で、一般の世人は富貴と名譽と權勢の爲に成功を得んごするのである。其所謂成功の一時的であつて、死後に傳はらないのは、當然といはなければならぬ。之に反して一身を善事に委ねる時は、第一其事業は識らずく、其人の人格を高尙ならしめ、次には其業は久しく世に残つて、後日に及んで必ず其實を結ぶのである。吾々の最も尊重する偉人中には、今に至つて世間が漸く其價値を了解し始めた事業をなしたのもある。けれども彼等は其一生の間に何の報酬を受くることが出来なかつたことを悲まない。彼等は其事業が、自分の死後に於ても残存し繼續するものであることを知つてゐるからである。

(三) 成功の路に於ける眞の困難は、之を得ようとする決心其物である。何人も成功を望まざる者はないが、其大多數の人々は之を徒らに怠惰の中に得ようとする事、猶生れながらにして、象牙の箸を握らうとするものが多いと同

じことである。試に路傍に金の生る木があつて、大判小判限りなく實を結び、側らに紙片に「何人も望むがまゝに之を取れ」と記してあつたとすよ。何人か之を採つて富者たることを欲しないものがあらう。けれど何人も成功を得んが爲には、五年十年、若しくは一生の間、有ゆる快樂を度外視して、精勵努力夜を以て日につき、朋友と談笑し、遊び戯れて共に娛むことも廢して、謹嚴に着實に、常に靜に考慮し勉學して、有ゆる規律に其身を従へなければならぬといふことゝなると、其趣が前とは甚しく異つて、彼等の多くは未來などを考へるのが煩さくなつて、僅に現在を樂むのみを事とするに至る人々であらう。之れ何事にも眞に成功するものが甚だ少き所以である。彼等が成功を望む念は頗る切なるものがあるが、而も其決心は甚だ薄弱にして、動もすれば我儘放題にしようとするのである。斯の如き風で成功を要めたとして、何處に之を得ることが出来るであらう。されば成功が得られないとしても、自己の意志の薄弱で

あつたことを攻めないで、幸運の缺乏を歎ずるやうな愚なことは、願くは學んで貰ひたくないものである。

(四) 人若し眞に何かに成功せんとせば、須らく其始めを善くしなければならぬ。そして之を巧に成就しようと思せば、自ら先づ其能くする所を發見しなればならぬ。素より事物によりては、何人にも不可能なことがないでもないが、吾々が思ふ程に、多數の事物が、不可能なものではなくして、立派な決心は、概ね能く困難を制して之を成就せしむるものである。果して然らば、自分の進路を自ら撰ぶことが出来ないにしても、自分の爲に撰ばれた事物を成就するに、せめては全力を盡さなければならぬのである。吾々は爲すことを好まないからといって、其事を成就することが出来ないといふ理由はない。只好きでないものを成さんとすることは、好きなことを成すに比べて稍困難なばかりである。けれども斯うした場合に盡される過分の勢力は、屢能く最良の結果

を生じ、成功を保證するものである。彼の最も成功した人々の多數が、最初に自分の進路を撰擇する能力を有つてゐたとすると、彼等は今の富を作り得た職業よりも、全く異つた職業を撰擇したことであらう。彼等は元來人生に於ける僥倖を好まなかつたのであるが、勇ましく之を攫んで之に全力を注いだ結果、其手に入りてそれが金貨と化したのである。

(五) 最後に述べなければならぬのは、誠に恐るべき敵であつて、人が若し之を撫育してよもするに、それは決して、成功の果實を味ふことが出来ないやうにするものである。此は即ち嫉妬心である。如何ばかり大なる成功を得たとしても、世には常に自分の得た成功よりも、更に多大なる成功を得る人がある。若しそれが爲に不満の念が起らば、能く注意しなければならぬのである。蓋し害毒の根源は、自分の胸中に潜伏するからである。此時に方りて僅に一縷の希望ありとすれば、それは其病毒の根源を除去することである。でない

と幸福は永久に汝の有とならないからである。けれども不満と、正當な抱負とを、區別することが一大事であるが如く、吾々が何時満足すべきかは、等しく一大事であつて、賢明の人であつて、始めて常に能く之を爲すことが出来るのである。さはれ、人が若し自分に對して忠誠であり得るとすれば、誰でも賞讃を博することの出来ない理由は決してない筈である。

努力せよ、直進せよ、猛進せよ、かうしての後に善美なる成功は汝のものであらう。

努力成功の實例(をばり)

努力成功の
實例奥附

大正九年七月十五日印刷
大正九年九月廿日再版發行

版權
所有

定價四十五錢
送料二錢

著者兼發行者 若月保治
東京市本郷區西片町十番地

印刷者 有澤宅次
東京市小石川區宮下町五番地

印刷所 新月社印刷部新星社
東京市小石川區宮下町五番地

發行所

東京市本郷區西片町十番地
振替口座東京二二七〇〇番

新月社

陸軍大臣 陸軍中將 田中義一閣下著

新時代青年の修養と指導

定價 參拾錢
送料 貳錢

久しく青年の指導にあたられた田中中將が、時代に慨して談話されたものにて、青年の指導者も一般教育家も、軍隊教育者も、皆之を一讀して、今後の青年を如何に教育すべきかを知るべく、青年自らはまた之によつて、如何に自覺修養すべきかを知らねばなりません

目次ぬきがき ▲新時代青年の自覺自立すべき時 ▲日本の現状と新時代青年の責任 ▲世界の大勢 ▲露國と列國との關係 ▲過激派とは何か及び其起源 ▲過激派政府の續いて居る理由 ▲矛盾と缺陷だらけの過激派 ▲露國民不幸の原因 ▲日本人の幸福 ▲勞働問題に對する青年の態度 ▲青年指導の根本主義と目的 ▲協同心と犠牲精神の涵養 ▲補習教育の徹底的實行 ▲圖書館の利用 ▲朝起と朝學の獎勵 ▲生活改善を直に實行すべきこと ▲青年團と軍入會など二十二項

青年修養叢書

陸軍大臣 田中義一閣下推獎
陸軍中將 文學士 若月保治著

新月社發行

第一篇 模範軍人の實例

定價 四拾五錢
送料 二錢

近年に於ける模範的軍人の實例をかゝけ、何故に模範たるかを説いて悲壯痛快、讀むく人をして勇奮感激する能はざらしむ、青年修養の好著であるは勿論諒話指導の最良書にして第三篇と共に姉妹篇なり。近來の快著！

第二篇 軍神 廣瀨中佐の修養法

定價 四拾五錢
送料 二錢

軍神の友人であつた田中中將の談を交へて、萬世の龜鑑、明治の快男兒たる中佐の修養法を語りつゝ其一代の傳を説く、一讀血涙下り肉躍る感あらん、讀め！

第三篇 模範青年 努力成功の實例

定價 四拾五錢
送料 二錢

廣く青年團について集めた町村模範青年の實例に加へて、隠れた偉人の眞劍の奮闘記である、前途有望な青年は讀んで「已ッ」の一語を發しなければならぬ

陸軍中將田中義一閣下著

未入營補充兵のしるべ

定價送料共
金拾八錢

補充兵であつて軍隊に入らないものが、心得て居るべきことや、簡閱點呼のことを、實に分り易くかゝれたものであります。

歐大戦の教訓と青年指導

定價送料共
金貳拾錢

今後の吾國青年少年を如何に指導教育すべきかについて、極めて眞面目に説かれたものであります。

田中 中將 青年修養談

定價送料共
金廿五錢

此からの日本の青年は、どういふ風に修養を積むべきか、又どうして行つたらば、成功して立派な人となる事が出来るかを、やさしく説かれたものであります。

入營準備教育最良教科書

入營者の最良参考書

陸軍中將 永沼秀文閣下推奨

帝國在郷軍人會本部編纂 入營前後の心得

定價二十錢送料貳錢 二十部以上前金注文送料不要

「入營準備教育に關する指針」の各項にあてはめて、丁寧に説明し、各方面の査閲を経たもので、おきに入營するものは勿論のこと、未だ徴兵検査を受けぬ青年も、受けた者も、其の父兄も是非讀まなければならぬ良書にて、大變わかり易く、やさしくかゝれたものです。

東京本郷西片町十番地

發行所 新月社

振替口座東京二二七〇〇番

帝國在郷軍人會本部藏版

陸軍大將男爵 福島安正閣下序
陸軍大臣陸軍中將 田中義一閣下選
文學士 若月保治講述

勇まし、元氣のある新時代の青年や軍人諸君は、卑しい俗歌など
を歌ふべきものではありません、今の名士名將達は、皆詩を吟じ
歌を歌つて元氣を養つたものであります、此書は即ち田中陸軍中
將が選られた愛國心を鼓舞するに足る詩歌を、若月文學士が極
めてやさしく講義をして、之に教訓を加へ、凡て振假名をしたも
のであります、敢て模範青年や軍人諸君にお勧めいたします、

愛國叢書

上卷下卷全二冊

愛國詩歌講義

小形美本定價各三十錢 送料貳錢

(十部以上取纏の前金注文に限り送料を要せず)
(五十部以上更に割引す切手代用注文壹割増す)

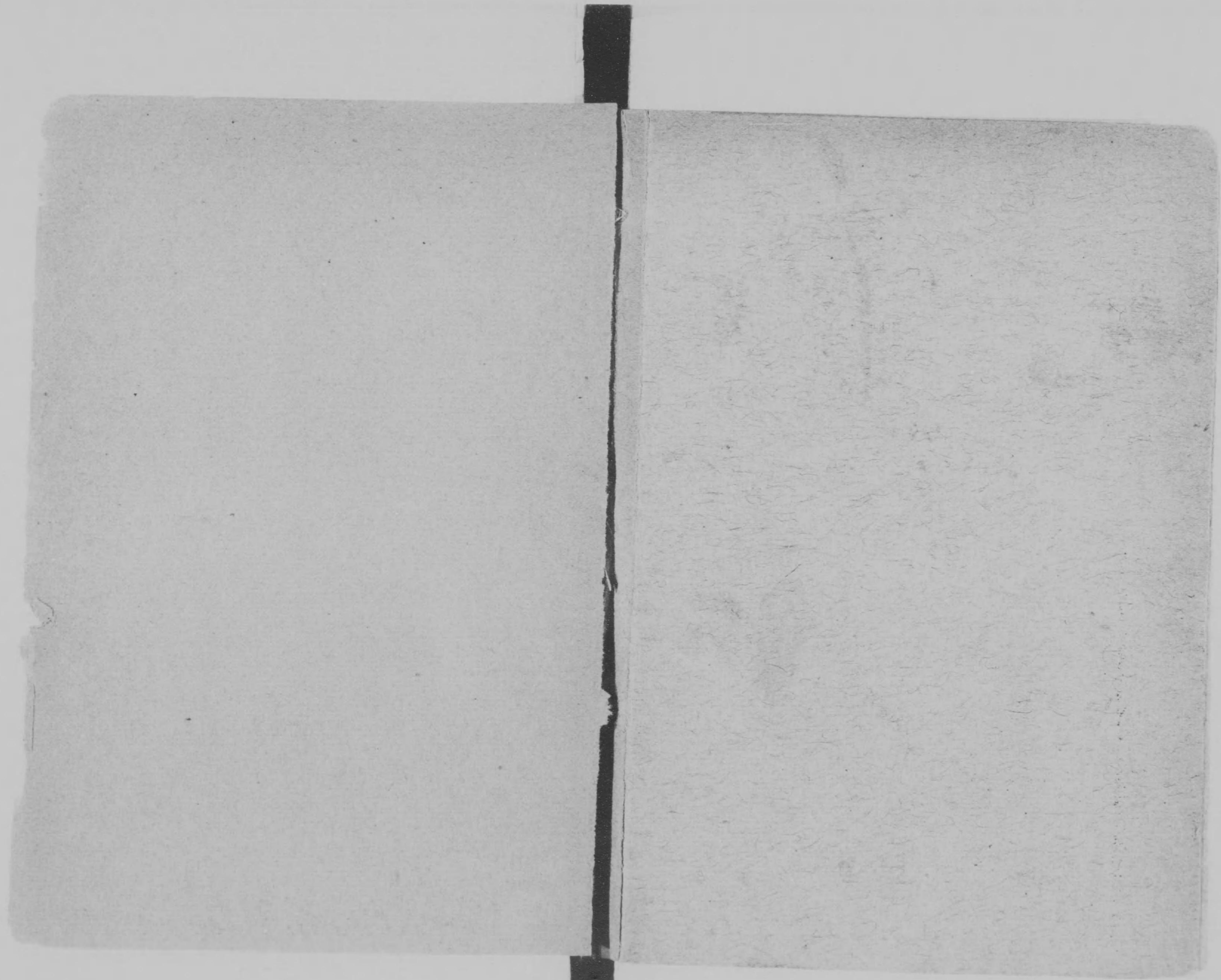
東京市本郷區西片町十番地

發行所

新月社

振替口座東京三三七〇〇番

書好絶養修



389
29

9.9.14

終

